

うん。だから、
ふくしまで。



大会概要

【開催趣旨】

全国の児童館・放課後児童クラブの職員や子ども・子育て支援等の関係者が一堂に会し、子どもの育ちや子育ての現状を共有するとともに、東北の復興に寄与するための人的ネットワークづくりを目的に開催します。子どもの体力低下や子育て不安等の課題が報告されている福島を会場に、子どもの遊びや居場所について研究協議をおこない、これからの子ども・子育て支援と東北復興を模索します。

【開催日】 平成25年12月14日（土）～15日（日）

【会場】 福島ビューホテル（第1部 オープニング・開会式～記念講演～特別報告／交流会）
コラッセふくしま（第1部 分科会Ⅰ～Ⅱ）
福島市子どもの夢を育む施設 こむこむ（第2部 遊びの公開ラボ）

【参加者】 児童館職員、放課後児童クラブ職員、行政担当者、研究者等 636名
（第2部遊びの公開ラボ）福島県民、第1部参加者等 1,200名

【参加費】 5,000円／1日参加3,000円
（岩手県・宮城県・福島県の参加者 1,000円／1日参加500円）
※公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンおよびサントリーホールディングス株式会社の支援によるものです。

【主催】 財団法人児童健全育成推進財団、全国児童厚生員研究協議会

【共催】 公益財団法人児童育成協会、福島県児童館連絡協議会、福島県学童クラブ連絡協議会

【後援】 厚生労働省、福島県、福島市、社会福祉法人全国社会福祉協議会、一般財団法人こども未来財団、全国地域活動連絡協議会、社会福祉法人福島県社会福祉協議会、岩手県社会福祉協議会児童館部会、宮城県児童館連絡協議会、民間児童館ネットワーク、東日本大震災中央子ども支援センター、東日本大震災中央子ども支援センター福島窓口、東日本大震災支援全国ネットワーク、特定非営利活動法人日本NPOセンター、福島民報社、福島民友新聞社、福島テレビ

【協力】 児童厚生員養成課程連絡協議会、社会福祉法人福島福祉施設協会、福島市子育て支援推進協議会、福島大学災害ボランティアセンター

【特別協力】 公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、サントリーホールディングス株式会社

— 第2部（遊びの公開ラボ） —

【出展】 国立総合児童センターこどもの城、岩手県立児童館いわて子どもの森、秋田県児童会館、茨城県立児童センターこどもの城、栃木県子ども総合科学館、ぐんまこどもの国児童会館、新潟県立こども自然王国、富山県こどもみらい館、金沢市児童館児童厚生員会、福井県児童科学館（福井県児童館連絡協議会）、愛知県児童総合センター、三重県立みえこどもの城、滋賀県立びわ湖こどもの国、大阪府立大型児童館ビッグバン、兵庫県立こどもの館、さぬきこどもの国、えひめこどもの城、岐阜市児童館・児童センター、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、株式会社松屋、児童厚生員養成課程連絡協議会

【寄付】 株式会社松屋

うん。だから、
ふくしまで。

大会日程

平成25年12月14日（土）		
(受付12:30～) 13:20～	オープニングアクト「YOSAKOIソーラン／学童クラブ清明っ子」	福島ビューホテル 3階（安達太良）
13:30～13:55	開会式	
14:00～15:00	記念講演「子ども・子育てのためのコミュニティデザイン」 コミュニティデザイナー 山崎 亮 氏	
15:05～15:30	特別報告「東北3県から未来へ」	
(受付15:30～) 16:00～18:00	分科会Ⅰ（13会場） A 「みんなの語り場カフェ ～児童館・児童クラブ職員の魅力って…！？」 B 「東北の子どもたちの2年半～児童館からのレポート」 C 「防災ワークショップ～ゲームを通じて子どもと楽しく学ぼう」 D 「放課後児童クラブの現状と課題Ⅰ」 J 「遊ぶ・遊びあう・遊びこむ～子どもの『遊び』をもっと豊かに」 K 「入園までが子育て支援？～児童館だからできる18歳未満の子育て支援」 L 「防災・減災・受援力～すぐに使えるよろず知恵袋」 M 「ここには、児童館があるぜ！～中高生の居場所づくり」 N 「放課後児童クラブ指導員の役割」 P 「「ヒト言」「ヒト目」で伝えてみよう～児童館・児童クラブのPR大作戦！」 Q 「トークバトル 児童館の値うち～大航海時代への序章」 R 「Re: born 〇生まれ変わる児童館～そのエビデンス(evidence)を考える」 S 「地域のチカラを高め、子育て支援～つながる、つなげる、児童館」	コラッセふくしま 3階・4階・5階
(受付18:30～) 19:00～21:00	全国交流会	福島ビューホテル 3階（吾妻）



平成25年12月15日（日）

（受付8：20～） 9：00～11：00	分科会Ⅱ（13会場） E 「市民協働の視点で児童館を考える」 F 「福島の子どもたちの2年半～放課後児童クラブからのレポート」 G 「放課後児童クラブの現状と課題Ⅱ」 H 「児童館・児童クラブとNPOが出会ったら～児童館・児童クラブとNPOの協働」 J 「遊ぶ・遊びあう・遊びこむ～子どもの『遊び』をもっと豊かに」 K 「入園までが子育て支援？～児童館だからできる18歳未満の子育て支援」 L 「防災・減災・受援力～すぐに使えるよろず知恵袋」 M 「ここには、児童館があるぜ！～中高生の居場所づくり」 N 「放課後児童クラブ指導員の役割」 P 「「ヒト言」「ヒト目」で伝えてみよう～児童館・児童クラブのPR大作戦！」 Q 「トークバトル 児童館の値うち～大航海時代への序章」 R 「Re：born 〇生まれ変わる児童館～そのエビデンス（evidence）を考える」 S 「地域のチカラを高め、子育て支援～つながる、つなげる、児童館」	コラッセふくしま 3階・4階・5階
11：20～12：00	エンディング（閉会）	コラッセふくしま 第1会場： 4階多目的ホール 第2会場： 3階企画展示室
13：00～	第2部 開場	こむこむ 1階（にぎわい広場）
13：30～16：00	遊びの公開ラボ	

平成25年12月16日（月）

エクスカージョン

Aコース／相馬、南相馬方面（9：00～15：00）

Bコース／いわき方面（8：30～13：00）

うん。だから、
ふくしまで。

開会式

■オープニングアクト 「YOSAKOIソーラン」

出演：学童クラブ「清明っ子」の子どもたち（福島市）
演目：よっちょれ（さあさみんなでどっこいしょ）

平成14年に開設した学童クラブ「清明っ子」。にぎやかな毎日を送っている、元気いっぱいの子どもたち。毎年、劇や一輪車パフォーマンスなどに取り組んでいますが、今回は「YOSAKOIソーラン」にチャレンジしました。

舞台上で精一杯踊る福島の子どもたちから、元気をもらいました。



■開会宣言 全国児童厚生員研究協議会 会長 千葉 雅人





■ 主催者挨拶



財団法人児童健全育成推進財団
理事長

鈴木 一 光

第13回全国児童館・児童クラブ大会は東北復興支援フォーラムと銘打って開催することとなりました。第1回は、平成7年2月11日建国記念日に東京からスタートしました。児童厚生員が自らの誇りを確認する狙いが大きかったために手弁当で実施することにしました。事の起こりはさらに遡ること5年前、東京の児童厚生員二人が都内に広く声をかけて同志を募り、平成3年2月11日今は無き東京都の児童会館に集まったのが発端です。この時、500円を持って50人が集まり、①児童館の価値を自分たちが強く認識して社会に発信していく会とすること。②毎年一人でも良いから賛同者を連れて参画することを約束して散会しました。

今回は特別に今までの価値観に加えて東北の復興支援ということを掲げました。「うん。だから、ふくしまで。」というキャッチコピーは、「福島」とウェル・ビーイングとしての「福祉」の掛詞です。生活基盤を安定させる福祉をしっかりと担っていこうということに致しました。福島の子どもたちは外より室内遊びが多い。これは全国の子どもの現状でもあります。この福島から子どもの健全育成を考えていこうというのが本日からの会議であります。

さて、平成23年の「今年の漢字」は何だったか覚えていらっしゃいますか。「絆」です。絆とは、一体感をもって離れがたい感情です。今年の漢字は「輪」でした。オリンピックも五輪ですね。これとは直接は関係ないんですけど、私たちも全国各地で子どもの幸せを考える輪を作っていくことが仕事ですから、良い漢字を選んでくれたと思います。それに加えて平成24年の漢字は何だったか覚えていらっしゃいますか。「金」、お金なんです。「絆」を「輪」にするにはちょっとお金がかかる。国も地方も財政窮乏はよく知っていますが、今、優先順位として、子どもに資本投下することの大切さをみんなで論拠（エビデンス）を示しながら、国や自治体の方々のご理解を得たいと考えております。

過ぐる12月11日、放課後児童クラブの基準をつくる専門委員会で報告書案を出されました。次は児童館だと思います。児童館が放課後児童クラブの子どもの居場所を含めて全ての子どもの居場所であるということ現場から根拠を挙げて論証していただきたい。専門職とは、言葉をもって説得力豊かに周囲の人たちに説得、説明をしていくのも一つの能力です。この会でぜひそういったことも真剣に考えていかなければならないと思っています。

開催にあたり、全国児童厚生員研究協議会の役員の方には、主催団体として何回も福島に入っていただきました。福島県児童館連絡協議会、福島県学童クラブ連絡協議会、そして公益財団法人児童育成協会こどもの城には、企画段階から大変お世話になりました。厚生労働省は、育成環境課長が一日お付き合いくださいます。福島県、福島市には適宜必要な助言をいただきました。加えて、公益財団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン様、株式会社松屋様には、特にご理解を賜り資金的支援もいただきました。その他、大勢の方々や団体の意志が通じて、この会が開催できたことを皆さんにお報せすると共に、実り多き会議であることを祈念して、開会のご挨拶とさせていただきます。

■ 来賓挨拶



厚生労働省
雇用均等・児童家庭局
育成環境課長

為 石 摩利夫 様

本日、全国大会が開催されること、本当におめでとうございます。また、日ごろから児童健全育成にご尽力いただいている皆様方に対しまして、この場をおかりいたしまして厚く御礼申し上げます。本日は福島県が開催地でございます。被災された皆様にお見舞いを申し上げます。

実は、震災直後、いわき市の親族が避難してきまして、狭い家で10数人で1カ月近く生活しました。ふとん2枚に5人が寝るというような生活でしたが、学校が再開するということで、学齢期の子どもの事を考えて、戻っていきました。小さな子どもも一人おりまして、帰るときは母親は非常に不安を抱えながら戻っていったというような状態でした。まだまだ災害の爪跡が残っておりますし、福島はまだ外遊びが制限されている状況もあります。また、戻れない地域もございます。そういう意味で、この震災が忘れてしまわれぬような取組も必要なのかなと思います。微力ではございますが、そういうことにも尽力していきたいと思っております。

さて、昨年8月に子ども・子育て関連3法が成立しております。平成27年4月から施行することになっておりますが、この中で、認定こども園、幼稚園、保育所といった施設給付や、小規模保育などの地域型保育給付、さらには地域の実情に応じた子ども・子育て支援13事業が一括した財源措置を講じて推進されます。地域の子育て支援を推進するために新たに制度化され、実施されることになっております。その中で児童クラブも位置付けられております。また、社会保障審議会児童部会の下に専門委員会を設けまして、児童クラブの基準について現在検討されております。先般、11日にそのまとめ案が議論されまして、一定の方向性が示されています。この基準は、基本的には、できるだけ今やっている方たちをこの事業の対象者とするを前提に検討が進められております。そういう意味では評価していただくことができるような基準になったかなと思っています。今後、これは報告書という形で公表されまして、年度内を目途に厚生労働省の省令で基準として定めることになっていきます。また、26年度になりまして、この基準をもとに、地方では条例で定めていただくことになります。従うべき基準と参酌すべき基準というのがございまして、従うべき基準の中には、職員の資格、員数の問題があります。開設日数・開設時間あるいは施設、児童の規模の問題が参酌基準になると思います。参酌すべき基準につきましては、地方の状況に応じて設置ができますけど、地方の条例の中で変更される場合には状況の説明が必要になります。そういった基準ですけれども、補助金として実施した放課後児童クラブの事業を少しでも質の高いものにしていくことを目指すものでございます。

皆様方の中には、児童クラブの職員としての資格で不安をお持ちの方もいらっしゃるかもしれませんが、実質的には現状を踏まえた措置も含めて設定していくということでございますので、不安を大きくされないようにしていただきたいと思っております。厚生労働省としてはそういった質の改善に向けた努力は今後も続けてまいります。一定の財源措置もまたしていかなければいけないと思っております。直接、児童にかかわっている方々には、子どものために自己研さんに努めていただき、研修への参加などを通じて新たな視点、技術の習得に努めていただきますことをお願いいたしまして、私からのご挨拶といたします。



■ 来賓挨拶



福島県知事

佐 藤 雄 平 様
(代理：副知事 村田文雄様)

皆様、福島によろこそお越しくございました。福島県民を代表して心から歓迎を申し上げます。皆様には、東日本大震災の発生直後から数多くの心温まるご支援を頂き、おかげ様で、本県は着実に元気を取り戻してまいりました。この場をお借りいたしまして、あらためて心から深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

福島県では、現在、震災からの復興と、「日本一安心して子どもを産み育てやすい県」これを目指して18歳以下の医療費無料化や屋内遊び場の確保をはじめ、子どもたちが安心して心豊かにたくましく育つことができる環境づくりに全力で取り組んでおるところでございます。こうした中、ここ福島で、児童館・児童クラブの関係者の皆様が議論を重ねられ、また大震災での経験を踏まえた意見交換が行われますことは、本県の子どもたちの健やかな育成に大きく寄与するものと考えております。皆様にはこの機会に相互の交流を深めていただき、この2日間が実りあるものとなりますよう、心からお祈り申し上げます。

さて、本県は、美しい自然や130を超える温泉、また「八重の桜」も放映されておりますけれども、特色ある歴史や文化、さらには、この福島市は果樹王国と言われておりますぐらい、果物をはじめとしたおいしい農産物や伝統的な郷土料理など、多くの宝に恵まれております。ぜひ、この機会に本県の魅力を存分にご堪能いただき、併せて、復興が進む「ふくしまの今」を多くの方々に正確な情報を発信していただければありがたい。このように思います。

結びに、本フォーラムの開催にご尽力いただきました関係の皆様へ深く感謝申し上げますとともに、ご参会の皆様のますますのご健勝、ご活躍をお祈り申し上げまして挨拶といたします。

■ 来賓挨拶



福島市長

小 林 香 様
(代理：福島市健康福祉部長
富田光様)

第13回全国児童館・児童クラブ大会が東北支援フォーラムとして、ここ、福島市において開催され、多くの皆様においでいただきましたことに対しまして、心より感謝を申し上げ、福島市民を代表して歓迎を申し上げます。

本市は名物が果物でございます。桃、梨、リンゴなど、さまざまな果物がおいしく実り、さらに飯坂、土湯、高湯など、さまざまな泉質の温泉地を楽しめます。ぜひ、この機会に十分ご堪能いただければ幸いです。

さて、東日本大震災から2年と10カ月、1,000日が経過いたしました。福島県、そして福島市にも全国からたくさんの励まし、そして支援をいただきました。ここに改めて厚く御礼を申し上げます。

本市では現在、原発事故による被害からの復興に地域を挙げて取り組んでいるところであり、その中で最も重要としているのが除染、内部被曝検査による健康管理、そして食品検査であります。特に食物の検査では農協と関係団体と連携いたしまして、万全の検査体制で安全の確保と風評被害の払拭に努めておりますが、おかげさまで収穫を終えた米、果物など、放射能が検出されている農作物はほとんどなくなっており、全国的な販売も、少しずつではありますが回復してきているところでございます。市内でも、現在は小・中学校の給食には市内産の米を使用しており、保護者の皆さんと情報を共有しながら安全・安心の確保に努めているところであります。

ただ、現在も山形県などを中心に自主避難しているご家族がいる一方、市内で暮らすことに不安を抱えて過ごされる方も多く、新聞等でも報道されたとおり、子どもたちの運動不足や、家族に対する心理的なケアが大きな課題となっております。このため、子どもたちのために室内遊び場や屋外の遊び場を整備するとともに、運動教室、それから自主避難から戻った保護者を対象にしたおでかけなどを開催し、子どもたちの健やかなる成長と安心して子育てができる環境を取り戻す取組を日々進めているところでございます。

この中にありましては、児童館そして児童クラブが果たす役割もますます大きくなっているものと考えているところです。この大会の第2部に遊びの公開ラボが企画されておりますが、子どもたちがつくりあげる遊びが、子どもたちの当たり前の遊びの命となり、東北のみならず、全国の子どもたちの元気につながることを切に願うものであります。

結びに、全国の児童館、放課後児童クラブの関係者の皆様が将来を担う子どもたちの健やかなる成長を見守り、支えていただいていることに深く感謝申し上げますとともに、ご参会の皆様のご健勝、今大会が有意義に開催されますことをご祈念申し上げて、歓迎の挨拶とさせていただきます。



■ 来賓挨拶



公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
東日本大震災復興支援事業部
副部長

津 田 知 子 様

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきましたセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの津田と申します。本日、とても元気な子どもたちの踊りで始まり、そしてここにこんなにも多くの児童館、そして児童クラブの皆様にお集まりいただいたことを大変うれしく思っております。

私たちセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンは、全ての子どもにとって、生きる、育つ、守られる、参加する、子どもの権利が実現されている世界を目指して活動している団体です。2011年3月の東日本大震災の発生を受け、緊急時には避難所で子ども広場というような活動を実施し、現在、ここ福島と、また宮城、岩手で復興支援事業をしています。

緊急当初、私たちが避難所で子ども広場というのをしたのは、災害が発生した直後でも、子どもたちの遊びや居場所がきちんと保障されることが大切ではないかと考えたからです。私自身、避難所を回っていく中で、ある子どもに「今何が必要かな」と聞いたときに、「思い切り真っすぐ走りたい」と言われたのを今でも忘れることができません。4月には学校が再開されるようになりましたが、やはり放課後の子どもの居場所や遊び場を保障することが大切なのではないかと考えました。放課後の子どもの遊び場、居場所に重要になってくるのが児童館であり、児童クラブであると思います。地域の子どもたち、また保護者にきちんと寄り添い、耳を傾け、そこで支えてくださっている皆様を支えていくということが私たちに少しでもできるのではないかと考え、この東北で指導員の皆様と一緒に研修したりしております。今回この大会に関しましてもその活動の一つとして、弊会セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンとサントリーホールディングス株式会社さまと一緒に実施している「フクシマ スム プロジェクト」の一環としてご支援させていただきました。

全ての子どもの権利が徹底され、子どもたちが一人一人自分らしく生きる。そして子どもたちが本来持っている力を発揮できるようにするには、今、私たち大人、そして社会の姿勢が問われているのではないかと考えております。私自身、子どもたちに寄り添い、向き合い、子どもたちの声に耳を傾けながら活動する中で、悩んだりですとか揺らいだりすることは多々あります。この2日間、そのようなものを皆さんと一緒に学び、そして普段の活動での懸念や知見を共有できる場になったらよろしいかと思っております。

これからもこの福島で、そして東北で、そして全ての日本の子どもたちの権利が実現できるように、皆様と連携しながら活動していきたいと思っておりますので、どうぞこの2日間、よろしくお願いいたします。

■ 記念講演（要旨）

「子ども・子育てのためのコミュニティデザイン」

コミュニティデザイナー 山 崎 亮さん

講師…… 山 崎 亮（やまざき りょう）さん

1973年愛知県生まれ。studio-L代表。京都造形芸術大学教授。慶応義塾大学特別招聘教授。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。「海士町総合振興計画」「マルヤガーデンズ」「studio-L伊賀事務所」でグッドデザイン賞、「親子健康手帳」でキッズデザイン賞を受賞。TBS「情熱大陸」、NHK「東北発☆未来塾」、テレビ東京「カンブリア宮殿」等メディア出演多数。主な著書に『コミュニティデザイン』（学芸出版社：不動産協会賞受賞）などがある。



■人を動かす3つの呪文

僕はもともとデザイナーなんです。公園の設計とか、空間の設計をやるというのが仕事でした。兵庫県有馬富士という山の麓に大きな公園をつくることになったんですね。野球場30個分ぐらいの公園です。山の奥にありますので、かなり不便なところにあるんですね。1990年代に既に兵庫県の全体の緑地計画があって、ここに公園をつくることは決まっていたんですね。周りは山だらけ、こんな公園をつくって、人が来なかった場合のことを考えて、何かもっと人が集まる仕組みが要るんじゃないか。この近くの自然博物館の副館長に相談に行きました。そうしたら「パークマネジメント」という言葉を教えてくれたそうですね。アメリカでは公園を運営するという考え方になっていると。博物館や美術館に館長がいる。でも公園には園長がいない。公園はつくったら、もう後は何もしない。ちょっと花を植えたり、草を刈ったりするだけで、勝手に遊びなさいということだから、実はハード偏重型なんですね。

ところが、2000年頃に日本でパークマネジメントをやっている人は全然いなかったんですね。だから有馬富士公園は日本で初めて市民参加型でパークマネジメントをやる施設になったほうがいいんじゃないかと提案してくれたそうですね。たまたま副館長が僕の大学のずっと上の先輩だったんですね。そのときに僕のことを思い出してくれたんだと思うんですけど、「あいつだったらまだ若いし、独立したてだから、きっと安くやってくれるだろう」とうちに発注が来ました。

その先生のもので勉強できるなら、と喜んでお引き受けしたということです。もうすぐ完成するところになって、急遽、僕が手伝うことになりましたから、もう物の形は決まっていたということです。いろいろ検討する中で見えてきたのが、やっぱりみんなが行きたいと思うところには人が要るんじゃないかと。

例えばディズニーランドは皆さんがゲストとしてディズニーランドへ行かれたとき、「ようこそ」と出迎えてくれるキャストと呼ばれる人たちがいるんですね。ミッキーとかドナルドとか、音楽を演奏してくれる人とか。普通の公園はゲストとして遊びに行っても誰も会わないんですね。関係者は芝生を刈ったりとか、ごみ掃除をしたり、花を植えなきゃいけない。「ようこそ」と言ってくれる人はほとんどいない。有馬富士公園は、キャストが入ることが大事なんじゃないかと思ったんですね。違うのは入園料を取らないということです。普通の公園は無料ですから、お金をお支払いすることはできないので、キャストもゲストも両方とも利用者と考えなきゃいけないんじゃないかと思ったんですね。プログラムを提供して「ようこそ」と言っている人も、遊びに行ったらプログラムを楽しむのも両方とも利用者で、両方ともお金をもらっていない、払っていない状態をつくっていくのが大事なんじゃないかと思いました。お金ももらわないだけでも、歌って踊ってくれる人というのを探さなきゃいけないわけですね。そんな都合のいい人はいるのかと探してみたら、公園の周りに何

なら払ってでも会場を借りて、自分たちがやっている活動をみんなに知らせたいという人が結構いることがわかってきました。

僕は話をしなさいと言われてれば、ずっと早口でしゃべり続ける人間なんです。本業は聞くことですね。50団体以上に「どんな活動をしているんですか」「今、困っていることはないですか」と話を聞きます。困っていることは大体みんな一致しています。まず会議室です。会議するための部屋をとるのが難しい。お金がかかっちゃう。会議室にお金を払うのはしゃくだとカフェに集まって話して、コーヒーを飲んだりして結局2,000円ぐらい払っている。会議が無料でできたらいいなという話があった。あとはチラシですね。チラシをつくっては、コンビニでコピーしているんですけど、結局お金を使っちゃったりする。あとは物置ですね。活動のための道具が自分の家にいっぱいになっちゃっているの、公園に置く場所があったら、公園でプログラムをやりたい。「じゃあ、その悩みを解決したら、今やっている活動をうちの公園でやってくれますか」と誘うことを繰り返しました。初年度は22の団体が公園に来て、活動をしてくれるということになりました。

話を聞きに行っているときは、僕はほとんどしゃべりません。発している言葉は「はあ」「なるほど」「すごいですね」大体この三つですね。この3つの呪文と首を大きく縦に振るだけの筋力がついていれば、コミュニティデザインは誰でもできるんです。1時間お話を聞かせてもらって「いや、きょうは楽しい話を聞かせていただきまし



た。ありがとうございました。じゃあちょっと検討して、またきますね」とか言って。2週間後に地域へ行くと「あの山崎というやつはなかなか優秀なやつだ」という話になったりして。何も優秀なことは言っていない。「はあ」「なるほど」「すごいですね」と頷いているだけで、優秀な人間になるというのはありがたいことだと思います。

そうやって友達になれた人たちが、公園の各所でいろんなプログラムをやってくれる。水辺の生き物観察会、音楽を演奏してくれる人、パソコン教室をやる人もいます。竹ひごと和紙でたこをつくってみんなで飛ばす。この人たちは毎週日曜日の昼間にやってくれていますね。土曜日の昼間は探検隊ですね。平日の夕方に星を見る会とかもやっています。探検隊というのは天体望遠鏡とか双眼鏡のマニアの集まりですね。ものすごい高そうなやつを持っているんですよ。

このリーダーの家に行ったら、リビングにガラスケースに入ったすごい高そうな天体望遠鏡とかが飾ってあるわけです。どんな活動をしているか聞くまでもないですよ。ね。「これはすごいやないですか。めちゃめちゃ高かったんちゃいますの」と言うとおっちゃんは「気づいたか」「これは日本で3台」みたいなことを言う人なんです。「これを持ってきて、子どもらに見せてください。子どもらは絶対に感動しますから」「しゃあないな、ほな行ったろうか」みたいな感じで公園に持ってきてくれるわけです。とにかく、見せたいわけです。語りたいわけです。それに子どもはいい反応をするわけですね。「すげえ」とか言って、感動しているわけですよ。この感動している子どもを見て、おっちゃんはものすごい満足げですね。「そうやろ。すごいやろ。ほな、また来るわ」みたいな感じで、来週は違うやつを持ってきてくれるんですね。子どもも来週はどんなものを持ってくるんだろうと、またおっちゃんに会いにくることにもなるんですね。

こういう団体の方々が困っていることの一つは団体の人たちが固定化し、高齢化していった、人数が減っていったんですよ。この公園で活動してうれしいことが、知り合いになれることみたいですね。100人に1人ぐらいは、天体望遠鏡が私も好きになりましたという人が出てくるわけですよ。何回か通っている間に、子どもじゃなくてお父さんのほうが天体望遠鏡が気になり始めて、ある日天体望遠鏡を買っちゃったりとか。ある日、このお父さんは

こっち側に立っている可能性もあるわけです。こういうのがやっぱりうれしいみたいです。ね。

■なるべく見える場所

児童館とか公民館の中で雨も降らないし、雪も心配ないのでもいいかもしれません。ところが、街行く人たちからはなかなか見えないんですね。街が賑やかになった感じがしない。だから外から見るところでやることは結構大事で、室内にこもっていると、街はさみしくなっちゃう危険性がありますね。だから何か活動するときに、できる限り外から見える場所でやっていくことが重要なと思います。なるべく見える場所で子どもたちが活動しているのも大事なんじゃないかなと思います。

児童館の中にこもって子どもたちが遊ぶようになっちゃったから街から子どもの声が聞こえなくなってきた危険性はないですか。例えば児童館職員から3年間、児童館を取り上げてみたらどうだろう。どこかでやらなきゃいけないので、何か工夫し始めるんじゃないか。街に出て行って、みんなから見るところで子どもたちと一緒に遊ぶことで商店街を元気にすることができるとも。公園を元気にすることができるとも。公園行政は公園行政で、こうやってわざわざ公園に来る人のためのソフト面を一生懸命頑張ろうとしています。少し極端に言っていますけどね。そんな意識を持って、街で活動することも重要なかなと思いますね。

おかげさまで有馬富士公園は約80万人の人が年間に来てくれる公園になりました。徐々に徐々に来園者数がふえていっていることになります。マーケティングの先生に言わせると、これはかなり珍しいと言われていますね。ディズニーランドでもオープンした年が一番多い。徐々に徐々に減っていった、アトラクションを新しくするとちょっと増えるんだけど、また減っていくというのが通常だと言うんです。これはどうしてだという話ですが、さっきの団体の人たちがすごいんですね。コミュニティの方々がファンを増やしているわけですよ。ね。初年度22団体からスタートだったわけですが、今では85団体の人たちが園内各所で毎週のように活動しています。活動団体数が増えると、そのファンが増えていきます。だから活動頻度が増えることと、活動団体数が増えるという、この二つで徐々に来園者数が増えていったんじゃないかなという気がしますね。

公園を拡大する予定地だったところで、子どもたちの遊び場をここにつくったらどうだという話になりました。「このマネジメントを全部考えているなら、デザインもやってくれ」と依頼されました。それまでも子どもの遊び場の設計は何回かやったことがあるんですが、ちょっと違和感はあったんですね。大人になっちゃった自分が遊具を設計するので何かうそがあるような気がしたんです。子どもが本当に目をきらきら輝かせて遊びたいと思う遊具は、子どもたち自身が考えた方がいいんじゃないかと思っていたので、近くの小学校の体育館を借りて、子どもたち150人に集まってもらって、自由に遊び場をつくってくれとやったんです。段ボール、こん包材とかプチプチになっているでかいやつとかをもらってきて、体育館の真ん中に山積みにしておくんですね。子どもたちがそれを引っ張り出して好きな遊び場をつくるわけです。基地みたいなものとか、滑り台みたいなものをいっぱいつくっていく。でき上がったものの寸法を測っていくわけです。子どもたちはどれぐらいの大きさで遊ぶのが好きなのかとか、どれぐらいの高さから滑るのが好きなのかと、いろいろと測って、それをそのまま遊具化していくんです。遊びのワークショップを先にやって、そこで見えてきたものを一個一個、遊具の設計に反映させていくことをやりました。

滑るところがあったり、もぐったりとか。家もよくつくりますね。ゲートみたいなものもよくつくります。女の子はこういう家の中で模様を書いたりすることが好きだね。こん包材のまとめてあるやつを、カーペットみたいにコロコロと転がして、その上を走ったりするとプチプチ音が鳴るんですよ。一気に会場が盛り上がり、全員がその上でジャンプし始める。音が鳴るといのはすごく重要だと思って、一角は音が鳴るような公園になっています。この地域にあった「くわばらくわばら欣勝寺」という民話も直接ここに取り入れたいと思った。この近くの大学から来てもらったプレイリーダーが絵を描けるというので紙芝居をつくってもらいました。プレイリーダーが大体何メートル四方の範囲だったら自分が一人で子どもたちと遊べるか話をし、これ以上大きくなると子どもたちがどこで何しているかわからないということになったので、50メートルで範囲を区切っていこうということをやりました。この公園は結構大きいんですけど、その中で範囲を区切って50メートル四方ぐらいの場所を順番にめ

うん。だから、 ふくしまで。

ぐっていくことにすれば、それぞれのところにプレイリーダーが3人いれば大体面倒を見ることができるということで、大学生たちでチームをつくって、毎週日曜日、子どもたちと遊ぶことになりました。ももとの公園をつくったときに残った土が公園の真ん中に積んであったんですよ。ももとの山はそのまま生かそうということにしました。この上に駆け上がるとどこにどんな遊び場があるかよく見えるんです。大学生が書いてくれた紙芝居を陶板に刷りつけた12枚の紙芝居が柵のところにあるわけですね。文字は書いていないんですが、プレイリーダーが説明していく。

大人の人だけが設計するんじゃないくて、子どもと我々の間をつなぐ大学生たちとみんな話しながら考えていくと、結果、子どもたちが「俺らがこうやって体育館で遊んだからこんな形になったんや」と言っていて、いっぱい来てくれるようになりますし、大学生たちも自分たちの意見が入っているからプレイリーダーとして何回も活動してくれるということになります。ただ専門家だけが設計しちゃうんじゃないくて、子どもや大学生も一緒に設計するほうがいいんじゃないかなということここでは学んだんですね。これをやって10年ぐらいたっています。当時、小学校5～6年生だった子どもたちが大学生ぐらいになって、プレイリーダーのチームに入ってきてくれる子がいたりするんです。この遊び場を通じてどんどん人が循環していくというのもおもしろい結果だと思いました。

■コミュニティをくつつける

東京都の北西に立川市というところがあって、市民会館の建物をリニューアルして、子どもたちが集える場所にしようということになりました。児童館の大きなものみたいな感じかな。子ども未来センターになることが確定しました。こういうときコンペというのをやるんですね。誰が設計するかを決めるコンペティションです。この市民会館をより格好よく、子どもたちがすごいいいなと思えるように、そして地域の人たちもどんどんここに来たくなるような設計を提案してくださいと設計事務所に依頼します。すると100とか200とか集まるんですよ。その中で専門家たちがチェックして、一番いい案が採用されて晴れて選ばれた人が設計者になるんですね。規模が大きいこの場合、ゼネコンと呼ばれる大手の設計事務所がエントリーしてくるということになりました。

僕はもともと設計をやっていたから設計者の気持ちはわからなくてもないですね。広いデッキをつくって、2階からも直接降りられるように階段をつくりましょう。ここは芝生にしましょうとか、いろいろ絵を描くんでしょね。建物を変えただけではなかなか賑やかに見えないので、色とりどりのバナーをつり下げるんですよ。あとは旗をなびかせる。木を植えてみましょう。潤い豊かになりますよね。手前にもちょっと木を植えてみよう。桜も咲かせちゃおう。「いつなんだ？ 季節は…」という感じがしますが、木がいろいろあると賑やかですね。まだ足りない。やっぱり人をいろいろ歩かせるんでしょね。音楽を演奏させちゃったりするんですね。それを聞く人がいっぱいいて。まだ賑やかじゃない。人をいっぱい描くんでしょね。一等になってから設計者は焦るわけですよ。こんなに人が来るのかよと。「来えへんかったらやばいやないか」ということで、コミュニティデザイナーに相談があるわけですね。「山崎さん、こんな感じにしてください」それは順序が逆だろうと思うんですけど、しょうがないですね。この歌ったり踊ったりしている人たちは誰か。立川市にはこうやって音楽を演奏する人もいるし、料理教室をやってくれる人もいるし、サッカークラブをやってくれる人もいるかもしれない。それを調べるところから始めましょうと、まちへ行って、「はあ」「なるほど」「すごいですね」と話を聞いて、「それをうちの子ども未来センターでやりませんか」と誘って回りました。

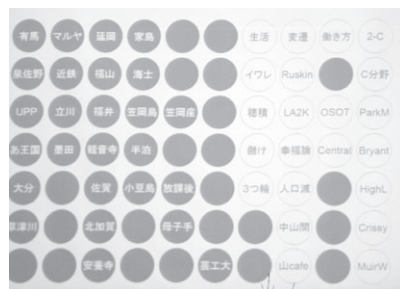
重要だったのは、この未来センターの中に入るプログラムですね。5万冊も漫画が入るという「まんがばーく」はもう決まっていた。漫画を読みに来るだけじゃ何かおもしろくないと思ったんですね。漫画はテーマがあるじゃないですか。それと立川市にはサッカークラブがあります。料理教室もあります。漫画のテーマとコミュニティのテーマをここでくつつけたら、漫画を読みにきた子どもたちがコミュニティの活動に参加して、人と触れ合ったり運動し始めたりするかもしれない。あるいはサッカークラブに来た人たちが漫画のことを知って、漫画の文化につながってもいいかもしれないということで、市民活動団体の話をじっくり聞いて、何か関係するような漫画があれば調べて、その漫画を「まんがばーく」に入れてもらうというふうにしました。

例えば、「キャプテン翼」とかをここに

置いておくわけですね。芝生だから周りに寝転がって読むんでしょ。読んでいるとだんだん足がむずむずしてくるわけですよ。ボールを蹴りたいみたいになってくる。オーバーヘッドキックをやりたいとなる。立花兄弟のスカイラブハリケーン、あれは本当にできるのか。すみません。同年代ぐらいの人しかわからない話ですね。むずむずしてきて、ふと奥を見ると、立川市のサッカークラブが来ているわけですよ。「オーバーヘッドキックやるか」みたいな感じで誘ってくると、漫画を読んでいた人たちがこちらへ走っていくと。あとは「美味しんぼ」の料理は本当においしいのか料理教室をやるとか。「キテレツ大百科」はいろんなものを発明している。読んだ後に工作教室とかをやるとすごいものができるんじゃないか。そんなことを提案しました。立川市内にいる活動団体の代表に来てもらって、その漫画に関係づけてどんなプログラムができるかという話し合いをしていってもらうことです。

話し合いの方法は幾つかありますけれども、ここでは漫画カードというのをつくりました。一枚引いて「忍者ハットリくん」と出てきたら、「忍者ハットリくん」をテーマに自分たちはどんな活動ができそうかをどんどん紙に書いていってもらうんですね。スポーツクラブだったらどんなことができるか。囲碁教室で何ができるか。意見が出たら次のカードを引いてもらって、「ゲゲゲの鬼太郎」ではスポーツ教室だったら何ができるか。料理教室だったら何ができるのか。結構アイデアが要るわけですよ。結構みんな出しますね。施設がオープンしたらそれをそれぞれやってもらいましょうと進めていきました。

子ども未来センターがオープンすると子どもたちが漫画を読みに来ます。ここでこもって漫画を読むだけじゃおもしろくないので、どういうふうに連れ出してくるか、地域の人たちと触れ合うか。コミュニティの方々もここへ来てはいろんなプログラムをやってきます。漫画の表紙が見えないように包んで漫画の中の名言だけを外に出し





ておきます。これで選べと。編み物教室では漫画をテーマにした編み物教室。子どもたちが書いた4コマ漫画をいろんな壁にどんどん張ってくれる団体も来ていますね。あと、廊下とか階段も漫画のコマみたいになっているところがあって、自分が印象に残っている漫画の名言みたいなやつをここにみんなが張っていていますね。これはキャプテン翼です。「ボールは友達」と書いてありますね。「諦めたらそこで試合終了ですよ」とか。あの漫画の名言がどんどん張られていくようなことになっています。

■客層と満足度が変わるデザイン

ちょっとみんなが見たくなるような、手に取りたくなるようなデザインであるということも大事です。プログラムはすごくいいのにチラシがダサいともったいないですよ。

たまに児童館とか公民館とか行って、チラシを見るんですけど、もう少しできるんじゃないかなと思うんです。薄い黄色とかピンクのA4の紙にワードでつくったんでしょうね。「わくわくワークショップ」みたいな文字が波型になっているやつとか。わくわくしないな。行くと楽しくて、すごいいいプログラムをやっていると思うんですよ。だけど、手には取らない。若い奥さんたちがおしゃれだとか、かわいいとか言って、持って帰って誰かに言いたくなるようなチラシであることが結構大事な気がするんですよ。インターフェイスと言います

けど。誰かと接するときのそこが重要で、ちょっとデザインを変えるだけで参加者の質が変わってきたり、数が変わってきたり。来てもらえば満足いくプログラムをやれると思うんで、そこが結構大事かなという気がします。

川に跡地を公園にしようというプロジェクトがワークショップのときにつくったチラシです。かわいデザインでしょう。ところが、もしこの会場にグラフィックデザイナーが集まっていたら、「これはちょっとダサいデザインでしょう」と言います。これ以上、とがったデザインを持っていくと、一般の人たちは私に関係ないと思うんですね。我々はデザイナーだから、真っ白な余白をイメージして、ニス塗りと言って、光が当たると読める薄い文字でサッと入れていくとかすごいシャープなデザインをやる場合もあります。でも、そんなのをやっちゃったら、地域のお母さんたちは関係ないと思って手には取らないんですね。でも、「わくわくワークショップ」だと、逆にまた手には取らないんです。このあんばいが大事なんですね。

大事な情報はやっぱりチラシの上3分の1に書くことです。サイズはA4にそろえることです。市役所へ行っても、児童館へ行っても、公民館へ行っても、こういうチラシのラックはA4サイズで差し込むようになっています。だから奇をてらってB5でつくってみようとか、細長くすると意味ないんです。ストンと下に落ちて見えなくなっちゃいますから必ずA4にする。ラッ

クは前にちょっとずれて並べますよね。だから、皆さんがつくったチラシは上3分の1しか見えなくなる可能性が極めて高いです。平置きしてくれたらそれはありがたいですけど、数が限られていますから、あとはラックの中へ入れていっちゃいます。この下が見えなくなっても、いつ、何人で、どんなプロジェクトをやるのか、それは有料なのか、無料なのかという情報だけは上3分の1に必ず書いておかなきゃいけない。さらにもっと下はどうなっているのかなと気になってもらうというのは大事です。そうやって手に取ってもらって、持って帰ってもらうというのが大事だと思います。ここでは若い子育て層の奥さんたちに来てもらいたいと思ったのでこういうデザインにしたほうがいい。でもターゲットが違えば、また別のデザインでしょうね。おじいちゃん、おばあちゃんに集まってほしいと思えば、これじゃだめです。もっとしゅい感じにしていかなきゃいけないし、チラシは縦書きにしたほうがいいでしょうね。横書きだと頭に入らないなんて言われますからね。日時も曜日も縦で書いてくださいなんて言われますね。誰に対して告知したいのかということが重要です。

テーマのカラーを決めるということも大事ですね。これは川の跡地だからチラシは水色にしています。ワークショップでは水色と黄色しか使っていないですね。会場もそのテーマカラーで通したほうがいいですね。配布する資料とか、名前を書くネームプレートも全部水色で統一したほうがいい



いです。やっぱり色の統一感が大事です。

ワークショップをやっていると付箋を使うんですが3色なんですね。水色と黄色とピンクです。だからテーマカラーの中に水色と黄色とピンクばかり出てきているのは、最終的にはそのイメージと合わせておいたほうが整理しやすいんですね。トーンを決めるとき、実は付箋の水色と合わせておくと、物事がわかりやすい。話し合いをしていったら、どうしてもぐちゃぐちゃになっちゃいます。水色に書いた意見、ピンクに書いた意見、黄色に書いた意見は第2回目のワークショップまでにビシャッとそろえて提示しなきゃいけないんですね。水色の意見はこのぐらい出ましたね、ピンクの意見はこれぐらい出ましたねとビジュアルでみんなに投げかえさなきゃいけないんです。ワードでつくった前回の議事録読んでいたら、もうスタートからテンションが下がっちゃいますから。「そういえば水色の意見でこんなのを出したな」、「ピンクの付箋に書いた、書いた。自然が近くにあると書いた。」とパッとわかるように。色で覚えていきますから。

テーマカラーは、こういうパワーポイントをつくるときに水色やピンクや黄色でまとめやすいです。川なのにテーマカラーを赤とかに設定するとすごいまともにくいんです。プロジェクトのテーマカラーを決めるときに付箋の色から選んでいくと、その後のまとめやすさというのは全然変わってきますね。

さらに、何人ぐらいそれを言ったかということですね。みんなが出していった意見の共通点は何なのかを分析して、まとめ上げていく。だから、チラシのデザインだったり、テーマカラーの決め方だったり、みんなが出してきた意見だったり、あるいは

それを写真に撮って記録にまとめたときのニュースレターのつくり方だったり、こういうものの一個一個が結構大事になりますね。ちょっと意識されると、客層が変わってくる。あるいは満足度が変わってくるんじゃないかなという気がします。

こういうワークショップの資料というのは、みんな捨てちゃうんですよね。持って帰ってくれなかったりするんです。でもこれは、1回目から10回目までの資料をダーッと閉じて一冊の本になるようにデザインされています。ノンブルといって、ページ番号が通しになっているんですね。目次とページ番号を入れて、表紙を入れると一冊の本になって、自分たちがワークショップでどんな話をしてきたのかというのがファイル化して本になっちゃう。最後は製本テープを張って閉じれば、1年間、みんなで話し合いをしてきたものを持ち帰ることができる。ちょっと大事な点かなという気がしますね。

例えば、児童館とかでチラシをつくらうとか、何かプロジェクトをやろうと思ったとき、まずは美術館に行ってください。お金払って中には入らなくていいです。美術館はネットワークを持っていて、自分たちがやる企画展は全国の美術館に送るんですよ。全国の美術館で今やっている企画展のチラシを片っ端から一枚ずつ取ってきてください。美術館のチラシというのは、プロのデザイナーに頼んでいます。わくわくワークショップはないです。ちゃんとつくっています。だから無料でデザインがきっちりしたチラシが手に入ります。手に入ったら、皆さんが企画しているチラシと一番近いような感じのものを持ってきて、定規で上とか下とかをはかってください。どれぐらい余白をつくっているのか、

何センチぐらいの文字で日付を書いてあるとか、メーンのテーマはどのぐらいか。それを丸々パクって同じレイアウトで同じ行数でやってください。イラストレーターなんか使う必要はないです。ワードで同じ大きさのテキストボックスをつくって、フォントも何となく合ったような感じでつくってみてください。「ピカソ展」と縦に書いてあったら同じように「わくわくワークショップ」と縦に書いたらいいんです。こちらにピカソの「泣く女」の写真がボンと入っていたら、子どもたちが遊んでいる写真を同じサイズでピタッと入れてみてください。行間が3ミリあけてあったら同じように3ミリで入れてみてください。すると、同じレイアウトなんだけど、児童館の特色のあるチラシができました。裏側に細かい情報を入れるのも同じようにしてみてください。これを5回、6回と繰り返していくと覚えますからね。次はゴッホ展とか、毎回違うやつをまねしていくと、毎回ファイルができますよね。次からは、あれでやったほうがうまくいくかなと頭が働くようになります。そこで、子どもたちの写真を3つか4つ変えていって、毎回、毎月のチラシをつくっていくと、そのうちオリジナルなデザインができるようになってきます。お金はかからないんです。パソコンにワードが入っていて、近くに美術館があれば。毎月通うとすごく分厚いファイルができますからね。それでチラシをまねできるようになっていくと「デザインうまいね」となりますから。児童館をおしゃれにしていこうと、多くの人が来てみたいというふうに思える場所に変えていくのも一つかなという気がしますね。



■ 特別報告「東北3県から未来へ」(要旨)

岩 手 県

大船渡市放課後児童クラブにこここ浜っ子クラブ指導員 久保田涼子さん

東日本大震災から2年9カ月がたちました。震災前、こここ浜っ子クラブは赤崎小学校の空き教室を使い、児童数30人、指導員4人の学童保育でした。その学童施設は今回の震災で全壊してしまいました。そのため、保育場所を転々としていましたが、今年の3月にセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンさんから支援をいただき、目の前に大きな公園のあるとてもいい場所に仮設施設が完成しました。今現在、児童数47人、指導員4人で毎日賑やかにしています。

私たちはこの震災でたくさんのものをなくしました。しかし、得たものもたくさんあります。まず支え合う人と人との絆です。震災後、なかなか連絡がとれない状況になりました。そんな中、学童の指導員仲間や研究会等で知り合った仲間が、場所を探し

ながら学童に足を運んでくれ、たくさんの物資を持ってきて、そして子どもたちと遊んでくれました。私たちは子どもと遊ぶというのがなかなか思うようにできなかったもので、とても助かりました。来てくれた方々は、「いつでも応援しているよ」、「何かあったら声をかけてね」、「また来ますよ」と言ってくれました。この言葉から人と人とを結ぶ絆が感じられ、とてもうれしかったです。

次に、えにし、縁です。学童にはたくさんのボランティアの方が来てくれました。その中には「知り合いから紹介されて来ました」という方も来てくれました。そしてまた、この縁をきっかけに、次の方たちの縁ができていきました。今は沖縄から北海道まで、またアメリカ、イギリス、メキシコなど、海外の方たちとの縁もできました。

そして感謝の心です。津波で何もなくなってしまい、日本中から、そして海外からたくさんのものを支援いただきました。この支援がなかったら前に進んで来られませんでした。支援を受けて当たり前

ということではなく、ありがとうございますという心からの感謝の気持ちを、私たち大人はもちろんですが、子どもたちも持つことができました。今年は竜巻や台風など、各地で被害が出ました。その様子をテレビなどで見ていた子どもたちは、自分たちができることをしたいと言って、アメリカのオクラホマの子どもたちにメッセージカードをつくって送りました。私は、子どもたちの何かしたいと思った気持ちがとてもうれしかったです。

子どもたちが通う小学校は3年後に完成の予定で、そこに学童施設も併設されることになっています。復興にはまだまだ時間がかかります。これからもまた子どもたちと一緒に、安心して住みやすいまちをつくっていくよう、頑張っていきます。



宮 城 県

塩竈市藤倉児童館前館長 氏家幾子さん

3月11日、大きな揺れと津波が襲い、藤倉児童館は傾いて使用できなくなりました。担当課に間借りのまま、市内小学校でおこなっている放課後児童クラブ10クラブの開所の準備を始めました。ライフラインは復旧していません。ただ、保護者が大変なときこそ300名の子どもたちを守ろうと、震災から9日後に開所となりました。児童館の片づけができるようになったのは4月末です。毎日、児童館に来て遊んでいた子どもたちが放課後、私たちと初めて顔を合わせ笑顔を見せました。その後、泣きそうになったんです。「どうしたの」と聞いたら「先生たち今までどこにいたの。私たちはどこにも行くところがなかったんだよ」と。私たちは、子どもたちと一緒に集まる場所、一緒に話す時間、それを保障しなければならなかったと思います。

さて、何ができるだろうか。5月の初め、職員3名で話し合いをしました。そこで、出前児童館をしよう。出前児童館をすれば、

毎日子どもたちと放課後、1時間でも2時間でも会えるだろうと。傾いた児童館の中には入れません。児童館の門の前に集まり、おしゃべりを始めました。避難所生活の子どもたち、被災した家屋の中で暮らす子どもたちがいっぱいいたんです。お父さん、お母さんが大変なので、自分の胸の内を語れずにいたんですね。これは大変なことだ。子どもたちの気持ちを受けとめなければならない。子どもたちとのおしゃべりの時間に費やしました。私たちは元の児童館の門のところでまずおしゃべり。そしてお散歩ができるようになりました。お散歩の後には公園にも行こう。いつもお外ばかりなので、保健センターにお願いして軒下をお借りすることになりました。雨が降ったらちょっと隠れて、雨が上がったら、また駐車場の端の方でわらべ歌、階段のところでじゃんけんをしたり、ゲームをしたり。小さなテーブルを持ってきて、ゴザを敷いて、駐車場の端のところで青空児童館をずっと続けてきました。

その後、保育所のほうの支援センターをお借りすることができて約1年。その後、地域の子どもたちを守ってくれていると町

内会の皆さんから受け入れられて、コミュニティセンターをお借りすることができました。小学生のほかに市内の公共施設をお借りしながら、乳幼児向けの出前児童館や大人向けの出前児童館を続けてまいりました。震災5カ月後には、市長が児童館の建て替えを決定したのですが、業者などの問題で予定よりおくれました。でも今年の1月19日、新児童館のオープンにこぎつけました。小学生の来館者は当然なのですが、乳幼児、親子の来館者が増えていることと、震災時に建て替えに協力していただいた町内会や各小学校のPTAの皆さん、母親クラブの皆さんの大きな力に支えられてきたことを今実感しています。現在、私は保育所のほうに異動になりましたが、みんなを照らし温かく迎えるお日様のような児童館を目指して、一緒に踏ん張ってきた職員が今も頑張ってくれています。

福島県（児童クラブ）

福島県学童クラブ連絡協議会会長 山田和江さん

東日本大震災、原発事故から2年10カ月が経過しようとしています。震災直後、6万人を超えていた県外避難者の数も、先月11月27日の復興庁発表では5万人を切りましたが、双葉郡8町村と飯館村、南相馬市の一部など、住み慣れたふるさとにまだ戻れない地域もあります。学校を再開した地域、統廃合した学校、学童クラブが始まった地域、学校から学童クラブまで2時間ぐらいかかり、長時間バスに乗って下校しているなど、元の生活環境とは大きく変わっております。

いわき市では双葉郡から避難している家庭の増加もあり、学童クラブ入所希望が増加しております。2013年度に2カ所増設される予定ですが、建設に当たってはさまざまな問題もあります。

福島市の学童クラブでは震災による被害はそれほど大きくありませんでしたが、そ

の後の原発事故による放射能被害への対応、風評被害は大きな課題です。現在、除染も行われており、生活はだんだん落ちついている感もありますが、子どもたちが自然に囲まれ、伸び伸びと遊べる環境に戻すには、まだまだ長い取組が必要です。野外遊びの時間制限を設けている学童クラブも多く、砂や土にまみれて思い切り遊ぶという状況には至っておらず、低学年の子どもたちの中にはブランコのこぎ方もわからない子どももいたり、子どもたちの運動能力の低下、肥満児童の増加が深刻となっております。全国ニュースでも取り上げられております。家でゲーム三昧、そのためコミュニケーション能力の低下など、いろいろ弊害も出ております。遊び場を確保するため、福島、郡山は市内の遊び場も増えておりますが、今まで子どもたちがそれぞれの場でごくごく当たり前にできていた普通の生活ができていないのです。

食べ物に関しては、福島県産は放射能チェックされ、安心して食べていただけるものが店頭に出されておりますが、不安の声もあり、ま

とんど戻れないのが現実です。県内外の避難所、仮設住宅での生活と、住まいを転々とするのを余儀なくされました。そんな中、広野町児童館は震災の翌年の8月から再開しました。除染を行い、放射線量は下がり、現在17名で活動しています。地域の方々と交流し、子どもたちの笑顔もたくさん出てきました。そのほかの浜通りの多くの児童館で子どもは増え、職員不足の中、懸命の運営が続けています。このような状況でも相馬市川原町児童センターの子どもたちは、自分たちの夢を描きながら、未来のまちマップをつくり、ボランティアの方々の支えを受け、諦めずに頑張っていこうとする生きる力が戻りました。

中通り地方。原発当時の風向きの影響を大きく受け、放射線量が高いところと、学校など子どもの施設から優先的に除染が行われました。土をめぐり、芝生をはがし、さらにコンクリートで山を埋め、放射線量を下げながら生活しています。外での遊びや活動などは制限され、元の生活には戻っていませんが、新しい行事や遊びを工夫しながら笑顔の仲間を増やしています。

た福島の子どもたちが県外でいじめられるということがあったり、福島から避難していることを伏せていたり、風評被害に苦しんでいます。福島で自然に囲まれる体験を通して健やかに育っていく環境を取り戻すことや、風評被害から子どもたちを守るため、今こそ指導員が学び合い、情報交換しながら、学童クラブと児童館が提携し、悩みや願いを共有することが大事だと考えます。保護者、指導員、地域、行政の方々と知恵を出し合い、子どもにかかわる大人たちがともに考える機会になることを願っております。

最後になりましたが、今回、東北復興支援フォーラムが、この福島の地で開催され、予想以上にたくさんの方々にご参加いただいたことは大きな力や励みになり、皆さんの温かさを感じるものです。また、たくさんのご支援をいただきましたことに厚く御礼と感謝を申し上げます、特別報告といたします。



会津地方。県内で最初に児童館ができた歴史のあるまち、会津。大河ドラマ「八重の桜」ブームで観光客が訪れるようになりました。原発から離れた地域にありますが、震災後は外での活動は制限され、室内での体力づくりを心がけました。今では外の活動もできるようになり、2年半ぶりに落ち葉拾いをした児童館もあります。

このように福島県内でもさまざまな地域の実情に合わせて活動してきました。福島県児童館連絡協議会も休会状態でしたが、昨年11月の研修交流会を機会に、私たちの学び合いの気持ちは高まり、今年の9月からは児童厚生2級指導員資格取得の研修会もスタートしました。まだまだ福島の復興への道のりは長いかもしれませんが、私たちは皆様の熱い思いを決して忘れません。ふるさとのために、輝く子どもたちの笑顔のために。最後に、全国の皆様方のご支援とご協力に心より御礼申し上げます。

福島県（児童館）

福島県児童館連絡協議会 田代真理さん

2011年3月11日から福島県は激変しました。美しい自然と豊かな農産物、森は誇れるものでした。しかし、生活は崩され、人生設計さえも大きく狂ってしまいました。3世代同居のよい家族関係も壊れてしまい、放射線量など、さまざまな理由で地域住民がばらばらにされてしまったのです。一言では言いあらわせないほど心は打ちひしがれ、深い悲しみの中での生活が続いています。でも、いつまでも下を向いてばかりはいられません。放射線量を下げするために除染を行い、米や野菜などの食品の放射線量をはかり、安全基準のもとに生活しています。子どもたちの元気な笑顔を取り戻すために、一歩ずつ歩み出しました。県内三つの地方の児童館における子どもたちの2年半についてご紹介いたします。

浜通り地方。特に、原発が立地する太平洋に面する沿岸は深刻な事態となってしまいました。役場を移転せざるを得なくなった9市町村のうち、戻ったのはたった2町村のみ。住民の大半、中でも若い世代はほ



分科会 A

「みんなの語り場カフェ～児童館・児童クラブ職員の魅力って！？～」

分科会 I 12月14日 16:00～18:00
3階 企画展示室 D



児童厚生員・放課後児童指導員の元気の源ってなあに？その原点はなんだろう…。迷った時に背中を押してくれたあの言葉、あの出会い。お互いの様々なエピソードを少人数グループでのワークショップ形式で語り合ってみませんか？

分科会内容

(1) 実施の様子

みんなの語り場カフェ「Café du EZO」がオープン～ワールドカフェ形式で、3つのテーマについて、テーマごとにメンバーを交代しながらグループセッションを実施しました。

経験も職歴も多様な全国から集まったメンバーでしたが、初対面にも関わらず、どのグループも共感できることや納得できること、興味深いことなどで話題が尽きることがありませんでした。笑顔、笑い声の中にも真剣な表情があり、セッションを重ねるごとに、会場の温度も上がっていく…とても充実した時間となりました。

(2) グループセッションでは…

この仕事を始めたきっかけは人それぞれ。お互いのきっかけを聴きながら、ちょっと初心に帰る自分。そして、児童館・児童クラブで出会った子どもたち、保護者、地域の方とのエピソードを語り、聴きあい、自分にとってのこの仕事の意味を見出していきました。

「子どもの発言に傷つくことがある」「自分の頑張りが伝わっていない」など、嬉しいことばかりではないけれど、「子どもに『ごめん』と言われたとき」「子どもが自分の膝に自然に乗ってきた」など何気ない子どもの言動に心が動いたり、「悩みを語る仲間（同僚）の存在」が力になっていたりする様子が語られていました。

「児童館は、何にでも挑戦できる場所」「自

分の得意が生かせる場所」。それは、子どもにとって大人にとってもそうでありたい場所です。もちろん、私たち職員にとっても同様です。メンバーの「こんなことをやってみたい」という思いに刺激を受け、前向きな気持ちで3つのテーマのグループセッションを終えました。

session 1

「きっかけ ～今の仕事を始めたきっかけを語ろう！～」

session 2

「やっててよかったなあ ～職員として嬉しかったことや、やりがいを感じていることを語ろう～」

session 3

「これから。 ～こんなことやってみたい こんな職員になりたいを語ろう」

(3) シェアタイム～ふりかえり～

「児童館・児童クラブ職員の魅力発見！再発見」

3つのテーマでのグループセッションを終え、分科会テーマをふりかえりました。もちろん、一人ひとりこの仕事に就いたきっかけも異なれば、持っているエピソードもやりがいと思う事も異なりました。だから、児童館・児童クラブ職員の魅力だと感じることも一人ひとり異なって当然です。ですが、「この仕事が好き」という気持ちは、共通の思いでした。

児童館・児童クラブで働く職員の数だけ魅力があり、そして、まだまだ児童館・児童クラブには『可能性』があることを再確認することができました。参加者のみなさん、一人ひとりが「私にとっての児童館・児童クラブ職員の魅力」を発見、再発見す

ることができたでしょうか。何よりも、この場で熱い思いを持っている全国の“同志”と出会い、思いを語り合えたことは、非常に貴重な体験となりました。

最後に、『明日からの自分へのメッセージ（もしくは今日の感想）』と記入。さらにグループメンバーからの応援コメントを受け取って『みんなの語り場カフェ～Café du EZO～』閉店です。

<カフェを演出するために…>

初対面の参加者同士がリラックスしてグループセッションができる空間づくりを目指し、北海道らしいお茶とお菓子、コースターやテーブルクロスなどのアイテムやBGMでおもてなしの心を表現しました。

また、参加者のみなさんから各地の銘菓、お漬物（！）などたくさんの差し入れをいただきました。

目の前のちょっとしたお菓子が会話のきっかけになり、和やかな雰囲気を演出することができました。みなさんのご協力に感謝です。

担当者から

ワールドカフェの手法を使って行った「語り場カフェ」は、初めての出会いにもかかわらず、和やかな雰囲気が進めることができました。スタッフも参加者のみなさんの一員として同じ立場でグループセッションに参加することで、お互いに共有できることが多いと考え、進行担当以外は全員がグループに入りました。同じ目線で参加

させていただき、参加者のみなさんと近い距離でセッションすることができたのは、私たちにとって、とても貴重な体験でした。

今回の分科会では、テーマに沿って各自が真摯に発言し、熱心に耳を傾ける時間となり、「自分が目指す職員像や仕事の魅力を発見・再発見して元気になった」、「カフェのテーブルに記録ができるのがとても良い」、「色々な立場の方とたくさんお話ができて楽しかった」、「気持ちすがすっきりした」、「この分科会をとってよかった」、「遠くから来たかいがあった」、「2時間では足りないと思うほど、内容が充実した分科会だった」など参加者のみなさんからたくさんのうれしい言葉をかけていただきました。

今回は限られた時間の中で「自分についての児童館・児童クラブ職員の魅力」について発見、再発見することを目指しました。次のテーマとしては、「子どもにとって魅力がある児童館・児童クラブとは」などが考えられます。

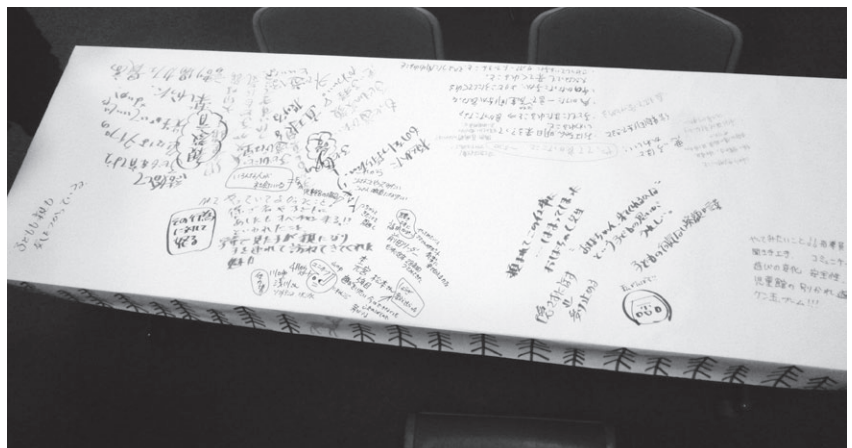
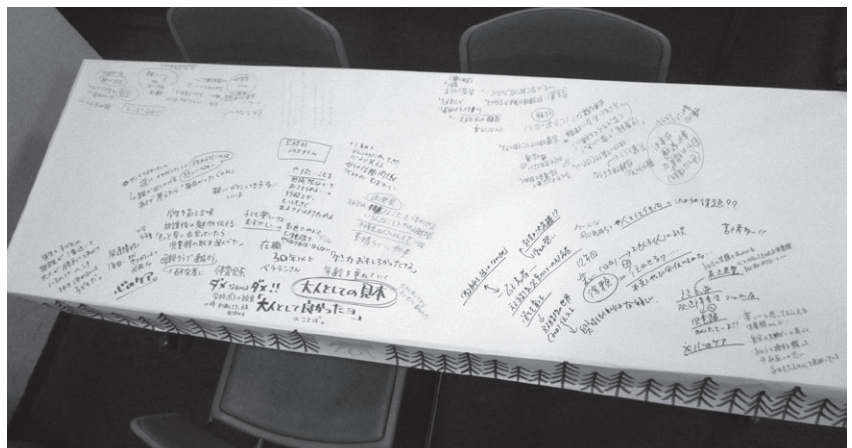
今回の分科会で終わりにするのではなく、今後も各地でこの分科会が発展していくことを期待します。ワールドカフェ形式でのグループセッションは、さまざまなアイデアを生み出す可能性の広がりを感じました。

参加人数

32名（分科会担当スタッフ含）

担 当

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会





分科会 B

東北の子どもたちの2年半～児童館からのレポート

分科会 I 12月14日 16:00～18:00
3階 企画展示室 ABC



東北の児童館はあの時どう動いたのでしょうか？今はどうなっているのでしょうか？子どもたちの生活や心身の変化に寄り添ってきた宮城県と福島県の児童館からの報告です。

【コメンテーター】 中鉢 博之さん

(東日本大震災中央子ども支援センター福島窓口主任コーディネーター)

東日本大震災後、仮設住宅等で避難生活をしている子ども達の支援を開始する。現在は、東日本大震災中央子ども支援センター福島窓口主任コーディネーターとして、福島県内の子どもの関わる支援者の支援、県外避難の子どもの支援、福島県内の子どもの支援の専門職の派遣・コーディネートの事業等を統括する。

【進行】 相馬市川原町児童センター所長 永井 清美さん

事例報告

「教室を借りて子どもたちが元気に集まる」

宮城県亘理町荒浜児童館

元荒浜児童館館長 鈴木由美子

地元から少し離れた小学校の一室を借りて児童館を行ってきました。家を失くした子ども、肉親を亡くした子ども、そんな子どもたちがたくさんいる間借りの児童館でしたが、所が変わっても見守ってくれる先生たちが一緒にいました。いつもと同じ先生の声、前と変わらぬ優しい笑顔、前と変わらぬ心で接してくれる先生たちがいました。

今は地元の新しい児童館に子どもたちの笑い声が聞こえています。大変だったけどみんな協力してくれるからありがたいと思っています。児童健全育成推進財団の支援、全国のみなさんの応援にも感謝いたします。

「子どもたちとの笑顔を育む」

宮城県塩釜市藤倉児童館

元藤倉児童館館長 氏家幾子

使えなくなった児童館の前で子どもたちを待ち、「青空児童館」をしたり、保健センターの軒下を借りてUNOやトランプをして「軒下児童館」も行い、子どもたちとの出会いを何よりも大切に育んできました。両手に遊び道具とテーブルを持ち、国道を歩く頼もしい職員の姿も見られました。近所の人からは、傾いてしまった児童館が、まわりの家の被害を弱めたと言われ

ました。

地域のたくさんの方の応援と児童健全育成推進財団の支援もあり、今は新しい児童館で子どもたちは元気に過ごしています。いろいろなつながりができたことにも感謝しています。

☆中鉢氏コメント

宮城県は、津波被害が深刻だったという中で、子ども達が被害にあい、家族を亡くし、自宅を流され、仮設住宅や公営住宅に移り、すっかり生活基盤が変わってしまいました。その状況で支えだったものは何だろうと言うことで、第1の居場所が家庭、第2は学校、第3は地域の中の児童館の役割や機能が大きかったのだらうと、お話を伺って思いました。

第2の居場所の学校も被害を受けたのですが、その一角を借り、自分も被災しながら、何もない所からのスタートで、職員の配置や機材の確保ということでご苦労があったと思います。その再開にあたってこういう支援が助かったというものがあたら教えて頂くと、ここに参加している方々にも参考になるかと思います。

鈴木さん・氏家さん→物もとても嬉しかったのですが、その後の縁を通して、いろい



ろなつながりができ、これから縁が続いていくということが一番の贈り物です。

【再開～子どもたちの笑顔が見たい声が聴きたい～】

福島県広野町児童館 根本 美江

震災当日は、1～5年生89名が登館し、集会室で過ごしていました。大きな地震の揺れで自分から机の下にもぐったり、不安のため泣き叫んだりする子もいました。携帯電話も繋がらず、最後の児童の迎えは、20時でした。その夜、児童館は避難所になり、原発事故からの災害を防ぐため、町民は小野町をはじめ県内外の避難所で過ごすことになりました。

避難所では、子どもの遊び場がなかったため、支援物資による遊びのコーナーを設けたことで、子どもたちの元気な笑い声が聞こえるようになりました。

再開に向けた除染では、放射線量が高いものは、撤去し、廃棄しました。芝生は新たに植え替え、館内・遊具などもすべて除染しました。

平成24年8月27日に小学校に合わせて児童館も再開し、子ども達も徐々に増え、現在、行事等にも地域の方々の協力をいただきながら一歩一歩復興へと進んでいます。今後も心ひとつに頑張っていきたいと思っています。

【福島県（会津地方・浜通り・中通り）児童館のあのとき・そして今】

福島県須賀川市立うつみね児童館 関根英子

他の被災県と何が違うの？と言われれば、いつまでも放射能の問題が尾を引いていることでしょう。

県児連野中会長と県内を回り取材をして、福島の実情を体感すると共に、置かれている環境の違いも解りました。

会津地方は、安心という観点から、低線量でも放射能に敏感になっていたそうです。今は元気を取り戻し、震災前のプログラムに近づけようとしています。

浜通りは、地震・津波・原発事故と大変な思いをされましたが、故郷のため、そして何より子ども達のため、多くの支援を受けながら頑張っています。

中通りは、県北から県中にかけて放射線量の高い地域があり、除染が追いつかない中、浜通りからの避難者を受け入れつつ、震災前の日常を取り戻すよう活動しています。

こうした児童厚生員の頑張り、自治体のバックアップ、ボランティアの支え等、みんなで復興しようという気概を感じました。未来では、大人として活躍する子ども達と共に。(詳しくはHPをご覧ください。)

☆中鉢氏コメント

福島県は全国でも例のない経験をされました。児童館・児童クラブだけでなく、どんな施設のどんな立場の人でも苦勞されています。その中で子どもたちを守ってきたのです。

また避難によって人口が減少しました。一時は、16万人が避難し、その内10万人が県内に、6万人が県外にいました。最初様子を見ていた人の中には、夏休みになってから避難していった方もいます。全国に避難していきました。

2年半経って、少しずつ福島に戻って来ています。戻って来てハッピーエンドではなく、避難したことで友達関係が難しくなっているということもあります。避難した、しないで、子どもたちにとって、どこか壁になったり(大人もそう)障害になったりしているということも若干数あります。そんなところが、環境の変化に伴う、これからの福島の課題ではないかと思っています。



グループ意見交換

4～5人に分かれ、できるだけ他県の方と意見交換や情報交換をしましょう

参加者の声

○それぞれ自分達の体験したことを情報交換しました。東京では、地震の際、部屋の実真中に人を集めてしまいましたが、必ずしもそうではないことが分かり、貴重な話を聞かせていただきました。

○児童館職員だった時、海外出身の方が訪ねて来て「私達も何かしたい。」とのことで、公立の児童館では難しい申し出でしたが、そのお母さん達の熱意に押され手助けをしました。その方達のネットワークで実行され、被災三県に支援金を送りました。

中高生は、バンド活動でライブを行い、職員には内緒で募金を呼びかけ寄付をしたと、後から聞かされ熱い気持ちになりました。その熱い気持ちでこの分科会に参加しました。

☆中鉢さんまとのコメント

この分科会に参加した方々も、遠くからお越しいただきありがとうございました。

支援者同士もつながっていくことが、子どもとのつながりになっていけるのではないかと思います。

この大会のつながりも大事にしていきたいと思います。

担当者から

参加者一人ひとりから被災地を応援して、いこうという気持ちが伝わり、熱いものを感じながらのスタートでした。

4組の事例報告の後、参加者の意見交換をし、コメンテーターの中鉢さんよりまとめていただきました。限られた時間の中で盛りだくさんでしたが、どれもカットできない内容で、発言者一人ひとりの言葉の奥には一言では語りつくせない思いと苦悩が



読み取れました。反面、皆さん明るく、笑顔で生きるたくましさを感じられ、参加者も感動をいただけたのではないかと思います。フロアからの意見交換の時間を十分に取れなかったことが反省点です。

この分科会で皆さんに共感していただき、共につながっていききたいという言葉が聞けたことが大きな心の救いです。またコメンテーターの中鉢さんから、「支援者同士もつながっていくことが子どもとのつながりになっていく」とお聞きし、今大会の出会いを通して、今後みなさんとつながっていけると確信しました。

これをきっかけに、ぜひ福島をはじめ被災地に足を運んでいただき、直接、東北を見に来ていただくことが継続した復興支援になるのではないかと思います。全国の皆さん、ご支援やご協力をいただき誠にありがとうございました。

運営協力

福島県児童館連絡協議会 宮城県児童館連絡協議会





分科会 E

市民協働の視点で児童館を考える

分科会Ⅱ 12月15日 9:00～11:00
4階 中会議室 401



指定管理者制度導入後、多様な主体が児童館を運営しています。仙台市の事例をもとにして、市民協働の視点からこれからの児童館運営を考えました。

【事例発表者】

- ① 柿崎 典子（公益財団法人仙台ひと・まち交流財団子ども育成課）
- ② 尾木 善宣（特定非営利活動法人仙台YMCAファミリーセンター・
仙台市西山児童館館長）
- ③ 齋藤 純子（特定非営利活動法人せんだい杜の子ども劇場仙台市榴岡児童館館長）
- ④ 渡部 一雄（仙台市子供未来局子供育成部子育て支援課）

【ファシリテーター】小岩 孝子（特定非営利活動法人FORYOUにこにこの家／宮城県児童館連絡協議会会長／仙台市東四郎丸児童館館長）

【進行】宮城県児童館連絡協議会 高橋 禎毅

分科会内容

1. 事例発表

- ① 「仙台市の児童館運営のあゆみ」 柿崎氏
仙台市児童館運営のこれまでの流れ
 - ② 「仙台市の児童館～4つの柱を軸に～」 尾木氏
国のガイドラインに沿った運営事業紹介
 - ③ 「仙台市の児童館☆協働を目指して☆」 齋藤氏
仙台市内児童館連絡協議会、宮城県児童館連絡協議会、子どもの放課後支援をすすめる会等市民レベルの取り組みと、行政との協働を目指したつながり（顔の見える関係づくり）について
 - ④ 「仙台市の児童館について＝平成25年度＝」 渡部氏
仙台市がめざす協働について
ファシリテーター：小岩孝子
- 小岩氏：ひと・まち財団は大きな組織ですが、現場の職員に伝える際に心掛けていることはありますか。
- 柿崎氏：地域と共に歩む児童館を意識して伝えています。
- 小岩氏：私も地域の中で他の指定管理者団体を含めて諸団体と連携して企画検討し様々なことに取り組んでいます。共有しながらすすめることが大事ですね。
- 小岩氏：尾木さんが4つの柱を実践していく時、子どもたちと接する時に大切にしていることはなんですか。
- 尾木氏：笑顔を決やらず、保護者の都合で

児童クラブに来ている子どもたちが自分から来たいと思えるような児童館にしようと心がけています。

小岩氏：齋藤さんは指定管理者に加えて、子どもの放課後支援をすすめる会やチャレンジ事業、学びのコミュニティなどいろいろなところとつながりあっていますがどんなふうに考えて取り組んでいますか。

齋藤氏：関わりが違って、目指すものは一緒です。同時進行だからこそ全体が見えるということもあります。

小岩氏：児童館のことだけではなく、多様ななかわりをもつ中で同じ目線で子どもを見ることによってつながっていくこと

が大事であり、話し合いの場作りは本当に大切だと思いました。

渡部さん、仙台市としてはどうですか。

渡部氏：指定管理団体の自主的な協議会運営・研修の取り組みに刺激を受けて行政内で連絡をとりながら協働の方向をすすめてきました。仙台は市民活動が活発なので、受託できる力を持つ団体がいることが行政としてありがたいです。児童館は地域の連携が大切。防災の視点を織り込みながら地域の子育て能力を高めることができると期待しています。

行政側が直接運営していないので、現場が見えないのが問題です。できるだけ現場に足を運びたいです。



小岩氏：地域に入っていく地域の中の人たちと連携しながら子どもを育てることができるのが児童館。仙台市も同じ思いだったことはうれしいです。市内連絡協議会として色々と提言されることに対してはどう思いますか。

渡部氏：現場で困っている状況は知らなければなりません。情報をもらうことは大事です。ワーキンググループなどで検討し、ベストではなくてもベターな方向を目指したいです。

小岩氏：それでは、今聞いた事例を基にテーブルごとに皆さんの間で話し合っていたきたいと思います。

2. グループワーク

ファシリテーター：小岩孝子

5つのグループに分かれて、仙児連の館長がコーディネーターとして各グループに入り、意見交換会を行いました。

参加人数

43名

参加者の声

- *非常に有意義な分科会でした。「地域とつながろう」「同じ想いの人たちとつながろう」「行政とつながろう」という思いを行動にうつしている仙台の方々のパワーはすごいと思った。
- *自分にとって新たな部分であり、皆さんのいろいろな意見や考え方が聞け、「目がテン・耳もテン」になりながら、勉強させていただきありがとうございました。
- *仙台市の児童館の歴史を改めて知る機会となった。一度原点に立ち返り、新しい可能性にむかって歩み出せる気持ちが湧いてきた。

担当者から

尾木氏：「市民協働の視点で児童館を考える」というテーマに基づいて様々な資料を作成したが、自分が分からなかった部分もわかったのが、発表者として参加できたのがとても良かった。行政の方（渡部さん）も一緒に参加出来たのが、とても我々としては心強かったし、良い距離感で行政ときちんと関わりが持っていると実感でき、市との距離が近くなったようにも感じた。

仙台ひと・まち：分科会の実施に当たっ

て改めて仙台市における指定管理者制度の変遷・歩みを振り返ることができた。整理できたことはとても貴重なことであったと感じた。また、この指定管理者制度における、各運営団体の関係や、仙台市との関係についても、良好な関係性を築いていることを当事者である私達自身が感じることができた。今後、何らかの機会を利用して現場の職員に伝えていく必要があるのではないかと思った。分科会の参加者はそれぞれ課題を持っており、その課題を解決できるようなヒントを少しでも得たいという気持ち、児童館を良くしていきたいという想いも伝わった。

齊藤氏：仙台市内児童館連絡協議会・子どもの放課後支援をすすめる会・県児連そして仙台市との「協働」のスタンスを報

告した。

コーディネーター：子どものことを真ん中に真剣に考えると様々な機関と協働することの大切さをあらためて感じた時間でした。指定管理団体がひとつになり仙台市の取り組みを発信できたことで、また大きなつながりが持てた。・瀬戸市、栃木、仙台市それぞれの取り組みの中で、児童館の存在意義や市民協働の重要性や必要性などについて共有し合う事ができた。・いい環境づくりの中に活動できていることを再確認でき良かった。

担 当

仙台市内児童館連絡協議会
宮城県児童館連絡協議会
運営協力：仙台市子供未来局





分科会 F

福島の子どもたちの2年半 ～放課後児童クラブからのレポート

分科会Ⅱ 12月15日 9:00～11:00
5階 小研修室



東日本大震災後、福島の子どもたちの生活の変化とともに、身体や心への影響も心配されています。

実際に福島の子どもたちに寄り添い、支援してきた“放課後児童クラブ”からの報告です。

【パネラー】	河内ひろみ	(福島市児童福祉課子育て支援係主任保育士)
	猪狩 利江	(いわき市四倉児童クラブ指導員)
	阿部 澄	(福島市渡利学童保育きりん教室指導員)
	中村 幹子	(福島市学童クラブ「清明っ子」保護者)
【コーディネーター】	山田 和江	(福島県学童クラブ連絡協議会)

分科会内容

① 福島の子どもたちの2年半

河内ひろみ

今福島県の子どもたちは、文部科学省が発表した全国体力テストでは男女ともに全国平均を下回り、福島県保健統計調査速報では肥満傾向が改善されていないということでした。これは全国的にも見られることですが、福島県は特化しているように思われます。それは原発事故による屋外活動制限からくるものではないかと考えられます。

体力向上や肥満解消に向けて、福島市では「すまいるあっぷ事業」を月に一度開催し、「ふるさと除染計画」事業で子どもたちが思い切り屋外で活動できる環境づくり、家庭や地域への正しい情報・知識の発

信と、あたりまえの生活を送れるよう整備を進めています。“ピンチをチャンスに”子どもたちとその周りの大人との信頼関係を深め、大人が責任を持ち子どもたちを守り育みながら、健やかな未来へと送り届けることが大切だと思います。

② いわき市四倉児童クラブからの報告

猪狩 利江

児童クラブがある四倉という地域は海も山もある自然豊かなところですが、その自然が震災の時には猛威をふるい、多大な被害をもたらしました。児童クラブの建物は津波の被害は免れたものの、山に降り注いだ放射線の影響で使うことができず、子どもたちを連れて開設場所を転々とする毎日が続きました。落ち着いたのは震災から1年後のことです。

設備面では落ち着いたものの、子どもた

ちの心身に与える影響はこれからもずっと心配です。だからといっていつまでも被災地であってはいけないと思い、震災の翌年にいわき市学童保育指導員会を立ち上げました。

子どもたちの安全を守り、保護者の気持ちに寄り添い、指導員として専門的な知識や技術を身に着ける、この思いを胸にいわきの元気を発信していきたいと考えております。

③ 福島市渡利学童保育きりん教室からの報告

阿部 澄

福島第一原発から60km離れているにもかかわらず、放射線量が非常に高いと全国ニュースにも取り上げられる福島市渡利地区にきりん教室はあります。

民間であるがゆえ、学校や保育所よりも



ずっと遅れた除染や線量計の配布に心を痛めました。子どもたちが主としている遊び場は、ついこの間の11月から遊べるようになりました。

学童保育での自然との関わり、毎日の生活体験や友達との深い関わりはとても大切なことです。指導員や保護者の力だけではまだまだ解決できないこともたくさんありますが、放射能の不安の中、子どもたちの自然体験や生活体験をどのように積み上げるかを保護者・指導員・地域の学童保育関係者の皆さんとともに力を合わせ、「あたりまえの毎日の生活」を大事にしていきたいと思っています。

④ 原発事故による自主避難体験と今考えること

中村 幹子

原発事故後、情報が不足する中で生活で子どもたちが受けた放射能の不安は今もなお消えません。避難指示区域とは違う福島市にいてもいいものか悩みに悩んだ末、子ども2人とともに埼玉県への自主避難をしました。長期避難をするためには転校の問題・福島市から来ていることを話せない孤独感・父親不在のストレスと様々な悩み

が自分自身を包みましたが、教育現場のサポートなどは大きな助けとなりました。

放射能の問題と家族離れ離れの問題のバランスに悩みながらも1年後に福島市に戻ってきました。思うように進まない除染や同じ福島市に住んでいる人の中でも考え方が分かれていることなど、制約がある中でも家族一緒というのは何より安心感があります。

福島はまだまだ大変だと言いたい状態にありますがここで生きていくことを選んだ私たち大人にとって、子どもたちが負い目を感じずに過ごしていけるよう、また原発事故を乗り越えている姿を見せてあげること、それがとても大事で必要なことだと思っています。

参加者数

55名

参加者の声

福島を他人事とは思えないと改めて感じました。震災は触れてはいけない事にはせず、子どもの声に耳を傾けることが大切だ

と思います。ガラスバッチを首から下げ、モニタリングポストが立っていても報道と現場は違って「福島は元気だったよ」と持って帰れます。

感想

河内さんの最後のお話の中で「3・11ではなく、少し長いけれども東日本大震災ときちんと言ってください」という言葉がありました。3月11日は何もかもが変わってしまった日・尊い命がたくさん失われた日でもあります。誰かにとっては誕生日であり、記念日であり、人によっては大切な日でもあるのだからと…。

福島を愛しずっと暮らしを営んできた祖父母の思い、ここで生活をしていこうと決めたお父さんやお母さんの思い、復興のため原発収束のために働いている人々の思い、立場が違ってこれからのことを思う気持ちはだれもが同じだと感じました。その思いをこれからの未来を作っていく子どもたちに伝えていきたいと思いました。





分科会 H

児童館・児童クラブがNPOと出会ったら ～児童館・児童クラブとNPOとの協働

分科会Ⅱ 12月15日 9:00～11:00
3階 企画展示室 D



被災地の児童館等へNPOの専門性をお届けする日産プレジデント基金「あそびプラスOne」。この活動の成果と課題を共有し、今後の児童館・児童クラブとNPOの協働のあり方を検討します。

【登壇者】

吉田 建治（特定非営利活動法人日本NPOセンター）
齊藤寿一郎（仙台市田子児童館、運動遊び研究グループ「きんにく〜ず」）
久保田涼子（放課後児童クラブにこここ浜っ子クラブ：岩手県大船渡市）

【コメンテーター】 高松絵里子（北海道中標津町子育て支援室室長）

分科会内容

■日産プレジデント基金「あそびプラスOne」の報告

1. NPOとは？

NPOセンターの吉田さんからNPOについてスライドでご紹介いただきました。法人格を得た特定非営利活動法人も、得ていない非営利団体もNPOであるという基本的な情報から我々の身の回りにも気づかないだけで多くのNPOが存在しているということなどご説明いただきました。

2. 「あそびプラスOne」

東日本大震災の被災三県（岩手、宮城、福島）で展開している「あそびプラスOne」について、主催団体の吉田さんから概要と、児童館職員で自身もNPO活動を行っている齊藤さんから派遣側から見た様子について説明を行いました。また、受け入れ側から久保田さんの事例発表がありました。この事業はNPO、児童館・児童クラブ双方が資金提供を受けながら多様な専門性を持つNPOに遊びの紹介をしてもらうという支援です。NPOと児童館をマッチングしてもらい、そこからさまざまな効果が生まれました。

■NPOとの協働の問題

1. 震災後のNPOとの関わり（受け入れ側）

ここでは「あそびプラスOne」以外の様々なNPOからも支援を受けてきた久保田さんから、より詳しく事例をご紹介いただきました。温かい支援の中で多くは

1度だけの関わりだったようですが、継続して何度も関わりにきてくれるNPOもあるとのこと。そして数ある受け入れの中で、支援内容がどうにも子どもたちにマッチしなかった事例を紹介していた、会場内は笑いに包まれました。全ての厚意を受け入れていた久保田さんですがその一件以来、内容を精査して対応にあたるようになったとのことでした。

2. 震災後のNPOとの関わり（派遣側）

齊藤さんから福島を中心に「あそびプラスOne」で2年間にわたり運動遊びの提供を行っていることを詳しく報告しました。メンバーが児童館職員ということもあり、1年目の支援にける思いは並々ならぬものがありましたが、押し付けがましくならないように支援したつもりでした。しかし振り返るとやはり想いが強くすぎてしまった、という反省があり、2年目はより受け手を意識した活動を心がけました。例としてはじっくり事前の打ち合わせ（状態の聞き取り）を行い現場にあった運動遊びの強度に変えたり、派遣時、派遣後にも楽しく活動できるように、事前に運動遊びの道具やダンスのDVDを贈ったりしました。結果「あそびプラスOne」終了後も来て欲しいという要望があり、現在も継続して遊びに行くようになったところもできました。

また、きんにく〜ずGMの渡辺さんから福島県の子どもたちが、想像以上の速さで体を使った遊びを忘れてしまっている様子も報告しました。

3. うまくやるコツ

受け入れ側の久保田さんと、派遣側の



齊藤さんの報告で共通していたのが「想いの違い」と「温度差」ということでした。児童館や児童クラブで考える行事へのあり方や想いが、NPOの目指しているところと必ずしも一致していないということです。多くのNPOは児童館や児童クラブがどのようなもので、どのような現場で行われているか知りません。双方の考えをつかみ、共有し、折衷できるポイントを見つけられたとき、NPOと児童館・児童クラブが共に実力を発揮する、まさに「協働」が行われます。児童館・児童クラブも積極的に発言、行動することで「らしさ」を伝えることができるのではないのでしょうか。吉田さんからは「児童館、NPO、双方の協働でなければ満足の得られる活動につなげるのは難しい」というコメントがありました。

■NPOとの協働の意味

1. 北海道中標津町の児童館まつり

コメンテーターの高松さんから中標津町で行われている地域ぐるみの児童館まつりについての紹介がありました。役所の方から地域の方、NPOなど多くの支援、協働によって大規模な活動になっているということでした。この話から児童館外の力を借り協働することで、児童館を中心に大きな行事や体験を行うことができるという事例を伺うことができました。

2. 協働の意味

最後に登壇者全員から一言ずつ発言しました。「児童館や児童クラブで我々が子どものためにやりたいことはたくさんあります。しかし実際は様々な問題にまずき、実現できないことが数多くあります。それならば外部に協力者を求めるということは地域レベルでは行われてきたことだと思います。ここからさらに一歩踏み込んで、よりよい児童館、児童クラブづくり、地域づくりとしてNPOと手を結び、活動の幅を広げていくという選択肢があつてよいのではないかと思います。新たに枠を広げることによって新しい可能性が子どもたちにも開けてくるのではないのでしょうか。」

このような事がNPOとの協働の意味として挙げられました。

3. 情報提供

吉田さんから現在行われている「NPO どんどこプロジェクト 子どものための児童館とNPOの協働事業」をご紹介します

だき閉会となりました。

参加者数

29名

参加者の声

NPOとの協働のためにはという疑問のなかで、資金提供や団体の探し方についての質問がありました。

→HPなどの活用を伝えました。

沖縄の方から「仙台から沖縄まで来てくれますか」という質問がありました。

→近隣で似た活動をしている団体を探すほうが良いとのアドバイスがありました。

児童館職員をしながらNPOを主宰しているというのはどういう形態で行われているのですか。

→現状を説明しつつ、様々なNPOがあるということ伝えました。

感想

NPOとの協働というのは児童館の世界でもまだまだ未知の世界の分野に挙げられるのではないのでしょうか。私は幸運にも「派遣側」としても「受け入れ側」としても関わる機会があり、この世界に触れることができました。わくわくする新しい出来事に胸躍りしますが、他団体との協働ということで非常に慎重に、緊張してことを進めたりしていました。私自身NPOとの協働に

は様々な可能性があると感じていますし、自分の専門外の方との出会いは意識の幅を広げてくれます。震災の復興支援という的に絞ってのNPOとの活動報告でしたがこの辺が参加された方たちが求めている部分なのかはちょっぴり自信がないところです。しかし今回の分科会で少しでも伝わればうれしいことです。

登壇された吉田建治さん（特定非営利活動法人日本NPOセンター）には実際にきんにく〜ずの活動に参加していただき、全力疾走していただきました。子どもたちの「よしださああ〜ん！」という応援の声はいい思い出です。このように現場に来ていただいて児童館の支援を考えていただける方がいらっしゃるのは本当に心強いです。ありがとうございました。

運営協力

特定非営利活動法人日本NPOセンター、運動遊び研究グループ「きんにく〜ず」

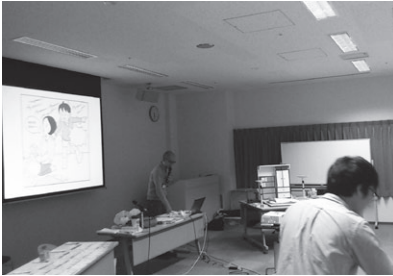




分科会 C

防災ワークショップ ～ゲームを通じて子どもと楽しく学ぼう

分科会 I 12月14日 16:00～18:00
5階 小研修室



カードや紙芝居をつかった防災ゲームで一緒に遊んでみませんか？

【講師】 小倉 文佳さん、高林 洋臣さん（特定非営利活動法人プラス・アーツ）
「教育」「まちづくり」「防災」「福祉」「環境」「国際協力」での、アート事業（イベント）の企画・運営。阪神・淡路大震災の教訓（被災者の声）を基に、ゲーム感覚で楽しみながら学べる防災プログラム、教材を開発。

分科会内容

東日本大震災を経験した子どもたちの声をもとに作られた新しい防災ゲームを紹介いただきました。子どもたちが楽しみながら防災について学べるようになること間違いなし！

参加人数

42名

担当

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

分科会 D

放課後児童クラブの現状と課題 I

分科会 I 12月14日 16:00～18:00
4階 多目的ホール



ソーシャルワークの観点から放課後児童クラブの現状と課題を共に考えます。

【講師】 植木 信一さん（新潟県立大学准教授）
社会福祉法人名古屋キリスト教社会館 児童指導員（放課後児童指導員）を経て現職

分科会内容

分科会Nと一部合同開催しました。厚生労働省為石課長からキーノートスピーチをいただきました。

参加人数

80名

担当

事務局

分科会 G

放課後児童クラブの現状と課題Ⅱ

分科会Ⅱ 12月15日 9:00～11:00
3階 多目的ホール



社会保障審議会の放課後児童クラブに関する専門委員会では何が語られたのか共有し、これからの放課後児童クラブを考えました。

【講師】 中川一良さん（公益社団法人京都市児童館学童連盟 常務理事・健全育成・子育て支援 統括監）

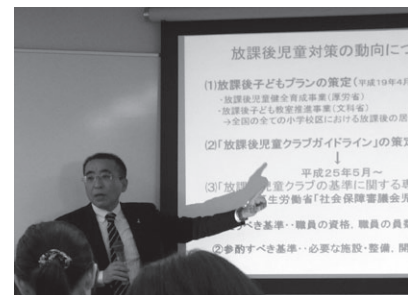
昭和52年 京都市児童館児童厚生員職に就く。京都市児童館学童連盟主任厚生員、住吉児童館館長を経て、平成19年より現職。厚生労働省「児童館ガイドライン」検討委員会 委員。社会保障審議会放課後児童クラブの基準に関する専門委員会 委員。

参加人数

58名

担 当

事務局



分科会 N

放課後児童クラブ指導員の役割

分科会Ⅰ 12月14日 16:00～18:00
分科会Ⅱ 12月15日 9:00～11:00
5階 特別会議室
(14日前半のみ 4階多目的ホール)



児童クラブ指導員の役割とはどのようなものなのでしょうか。12/14は改訂版放課後児童クラブガイドラインから、12/15は放課後児童クラブ指導員に求められる倫理の視点から考えました。

【講師】 野中 賢治さん（財団法人 児童健全育成推進財団 企画調査室長）

岩手大学教育学部卒。昭和50年より文京区の児童館、育成室（放課後児童クラブ）に勤務。全国学童保育連絡協議会会長も務める。文京区柳町児童館館長を経て、平成17年より現職。児童館・放課後児童クラブの研究等に携わる。厚生労働省「児童館ガイドライン」検討委員会 委員。社会保障審議会放課後児童クラブの基準に関する専門委員会 委員。

参加人数

12/14 29名
12/15 38名

担当

事務局





分科会 J

「遊ぶ・遊びあう・遊びこむ ～子どもの『遊び』をもっと豊かに～」

分科会Ⅰ 12月14日 16:00～18:00

4階 中会議室 401

分科会Ⅱ 12月15日 9:00～11:00

3階 企画展示室 ABC



『遊び』を通して子どもを育成する児童館・児童クラブ。あなたの目の前にいる子どもたちは、ちゃんと遊んでいますか？遊び合いながら、子どもにとっての遊びの意味や遊びに関わる大人の役割を、もう一度確認しましょう。

分科会内容 1日目

①アイスブレイクゲーム

普段の活動にもすぐに取り入れられるジャンケンを用いたゲームで遊びました。

・後出しジャンケン

・ジャンボジャンケン

(5人でグループをつくり、全員で手を表現してジャンケンをする)

・八百屋

(リーダーがいう言葉を聞き、八百屋に売っているものには拍手、売っていないものには拍手をしない)



②グループワーク

今の子どもたちは、「昔に比べて遊べなくなった、遊びを知らない」と言われており、皆さんも普段の様子から実感していると思います。「遊べない・遊びを知らない」というのは、自身の子ども時代と比較していることが多いのではないかとということで、まずは私たちが子どもだった頃の遊びについて考えることから始めました。

(1) 子どもの頃を思い出し、付箋用紙に『遊びの名称』を書く

だるまさんがころんだ・だるまさんがへをこいた、秘密基地作り、石投げ・水切り、陣取り(釘を使用)、陣取り(3×3のマスに○と×を書く)、ゴム跳び・ゴム段、竹馬、ままごと、馬とび、缶けり、長縄、川遊び、ザリガニ釣り、ドーンジッケッタ・ドーンジャンケン、はないちもんめ、かごめかごめ、あぶくたつた、けいどろ・どろけい・どろじゅん、氷鬼、高鬼、ペーゴマ、大根抜き、メンコ・ベッタ、十文字・田んぼ、かかし・おでん・けんぱ、文字掘り(地面に字を書き、土を薄くかけて、隠れている字を当てる)、Sけん、ろくむし、草花遊び(花をすりつぶす、草相撲など)、ザリガニ釣り、カエルの解剖、虫取り、おはじき、お手玉、ろう石遊び、ぬりえ、きせかえ(紙製)、リカちゃん人形、ドッジボール、キックベース、野球、バドミントン、その他名前のわからない遊びも多数



(2) 各々が書いた『遊び』を、グループごとに1枚の模造紙にまとめる

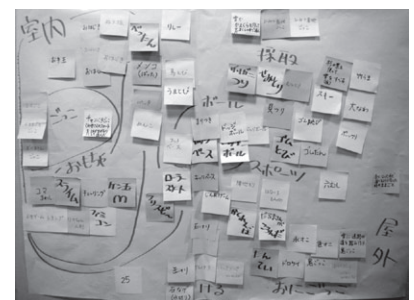
地域によって、呼び名が違ったりルールが違う場合があるので、遊び方を紹介しながら【外遊び/室内遊び・ひとり遊び/集団遊び・男子/女子/混合・低学年/高学

年/全学年・静かな遊び/活発な遊び]などの特徴ごとに分類しながらまとめました。



(3) グループごとに発表する

子どもの頃を思い出している皆さんはとてもイキイキとした表情で『遊び』を語り、中でも『馬とび』の説明は盛り上がりました。世代によっては『馬とび=長馬とび』を指し、危険なことから禁止になったという遊びを実



(4) 子どもの頃を思い出し、遊ぶ

グループごとに『遊び』を選び、遊び方がわかる人がリーダーになってメンバーに遊び方やルールを説明しながら遊びを進めました。物を使わずにできる『大根抜き』や『にらめっこ』、ビニールテープやペットボトルキャップ、ロープ等の材料を活用して『石投げ、かかし（おでん）』や『長縄』で遊びました。「では、遊んでみましょう!」の呼びかけで、その場にあるものでパッと始められてすぐにルールを理解することができる遊び、そしてそれを共有できる仲間がいる楽しさを実感しました。グループが自然に合体して輪が広がるなど、会場内は歓声を笑顔が溢れました。



(5) 決められた条件のなかでできる『遊び』を考える

身近に豊かな環境や時間、遊ぶ仲間があった昔に比べて、どうしても制限が多くなっている今の子どもたち。その中で遊びを豊かにするにはどうしたらよいかを、グループごとに、引いたカードに書かれた条件〔パターン①：室内/10名程度/低学年/男児が多い パターン②：室内/10名程度/高学年/女児が多い パターン③：室内/20名程度/全学年/男女半々〕に合わせてルールや道具を工夫し、子どもたちが魅力を感じるゲーム的な要素を加えながら、『遊び』のアイデアを出し合いました。

パターン①「ろくむし」

- ① 鬼を2人決める。
- ② 鬼は、球を落とさないように、真ん中でキャッチボールをする。
- ③ 逃げる側は、ボールに当たらないように、

部屋の端から端まで逃げる。

- ④ 鬼は走っている人に当ててアウトにできる、もしくは落とさずに10回キャッチボールができれば誰かを当ててアウトにできる。

★逃げる側がひとりも6往復できなかった時は、鬼の勝ち。

★鬼に当たらずに全員が6往復できたら、逃げる側の勝ち。

パターン②「女王様をねらえ」

- ① コートを4つに分け、バレーボールと同様のルールで、3回の間にどこかの陣地にボールを入れる。

- ② 入れられなかったチームは4のコートに降格し、他のチームは1つずつ上がる。

★10サイクル、もしくは10分で①にいたチームが女王様になる。

パターン③「軍手とタオル」

- ① 一重の輪を作り、真ん中から軍手（両手につけて外す）とタオル（首に結んでほく）を回す。

★軍手とタオルの両方が同時にきた人の負け。

③まとめ、振り返り

同じパターンカードを引いたグループからも、様々な遊びのアイデアが出されました。すぐに取り入れられそうな遊びや、遊びをアレンジする際に参考になる視点など、各々に新たな気づきがあったと思います。今の子どもたちの置かれている遊びの環境は、豊かとは言い難いかもしれませんが、それでも子どもにとって遊びは生活そのものであり、発達に欠かせない重要な要素がたくさん含まれています。室内遊びは、どうしても制限が多くなりがちですが、その中でいかに道具やルールを工夫して遊ぶことができるか、環境に合わせて遊びをアレンジしていくことが大切で、まずは私たち大人に遊び心とアレンジ力がなければ、子どもたちの遊ぶ力を引き出すことはできないと思います。子どもたちと一緒に遊びを生み出すことを楽しみながら関わっていくことが必要だということをあらためて確認する機会となりました。

分科会内容 2日目

①アイスブレイクゲーム 【写真⑧】

普段の活動に取り入れられるグループ分け、グループ対抗のゲームを紹介しました。

- (1) ジャンケン列車（負けた人が先頭になる）

- (2) 家族の輪（三角クジを1枚選ぶ。クジには、サザエさん一家のひとりのイラストが描かれており、一家全員が揃うようにグループを作る）

- (3) サザエさん一家リレー（グループで力を合わせて、輪っかを落とさないように持ちながら走る）



②グループワーク

今の子どもたちは「遊べない・遊びを知らない」と言われていますが、普段関わっている子どもたちの様子を思い浮かべて、それぞれの地域ではどんな遊びをしているかを出し合うことから始めました。

(1) 子どもたちが遊んでいる『遊び』を、付箋用紙に書く

鬼ごっこ（テレビ番組の逃走中にちなんだもの）、缶けり、一輪車、ドッジボール、ツイスター、立体四目、LaQ、動物しょうぎ、折り紙、フラフープ、お店屋さんごっこ、サッカー、野球、田の字鬼、ケイドロ、カブラ、チェス、プラレール、トランプ、マンカラ、オニムゲーム、ドンジャラ、人生ゲーム、ままごと、縄跳び・長縄跳び、ぬりえ、オセロ、レゴブロック、アイカツ（アイドル活動）、UNO、けん玉、チェス等



(2) 各々に書いた『遊び』を、グループごとに1枚の模造紙にまとめる

グループごとに、〔外遊び／室内遊び・ひとり遊び／集団遊び・男子／女子／混合・低学年／高学年／全学年・静かな遊び／活発な遊び〕などの特徴ごとに分類し、「子



どもの遊ぶ様子を見ていて気になるポイントや課題だと思う部分」を話し合いました。

- ・買わないと手に入らないものが多い
- ・物や道具、おもちゃやカードを使って遊ぶものが多い
- ・1人で遊ぶもの、少人数で遊ぶものが多い
- ・大人が子ども向けに考えた遊びが多い
- ・室内で遊ぶものが多い
- ・昔は季節感があり、自然相手の遊びが多かった
- ・動く遊びが少ない
- ・遊びの種類が少ない
- ・昔は空間や状況に合わせて遊びを変化させていた
- ・昔は兄弟などで伝わっていたが、今は職員が伝承している
- ・時間をかけて遊ぶものが少ない
- ・学校で行うようなボール遊びが王道になっている

(3) 児童館・児童クラブの「あるある！」寸劇

「つまらない！先生、何か遊ぶものない？何かしようよ」を連発するケースや、狭い部屋でキャッチボールを始める男子と、それを迷惑に思った女子がその様子をすぐに先生に言いつけにくるケースを、寸劇で表現しました。ウンウンと大きく頷き、どここの児童館・児童センターにも共通するケースであるとあらためて実感しました。

(4) フリートーク

寸劇の中に登場した「つまらない」を連発する子どもに対して各々の現場ではどんな働きかけをしているか、またキャッチボールのケースのように、遊び始めた子どもも周りの子どもたちも双方の気持ちをできる限り尊重しお互いに満足できるようにするにはどんな関わり方ができるか等を、グループで自由に話し合いました。

③2日間を通してのまとめ・振り返り

1日目は、私たちが子どもだった頃を思い出して『遊び』の楽しさや大切さを再確認し、2日目は、今の子どもたちの遊びを見直し、遊びに関わる大人としてどんなことを心がけたら良いかをそれぞれのグループで話し合いました。魅力ある遊びを提案するために私たち自身の引き出しを増やすことや、その言葉を発する子の気持ちを汲み取り寄り添う力が必要であること、他の友達と上手く橋渡ししてあげる関わりや、

大人が遊びに入る場合の“入り具合や引き具合”を計ることなど様々な意見が出されました。そして、キャッチボールのケースでは、大人の声のかけ方次第では、子どもたちは禁止されないように様々な工夫をしたり、みんなで折り合いをつけルールを決めることができるのではないかという話も出ました。子どもたちにとって、魅力的な『遊び』ができるように、私たちは言葉をかけたり環境を整えたり、時には一緒に遊んだり見守ったりしながら子どもたちと関わっていくことが大切だということを再確認しました。今回のこの出会いを大切に情報交換したり励まし合ったりしながら、また明日から各々の場所で頑張っていこうと、決意を新たにしました。



参加者数

- 1日目：54名
- 2日目：76名

参加者の声

- ・2日間を通して遊びについて考えて体を動かしました。「子ども達とちゃんと遊べてますか？」胸にささる思いです。私はやれているのかなと再確認をし、子ども達の笑顔を見る為、この言葉を心に置き、明日から又、子ども達と向き合っていきたいです。
- ・全国の先生方と、子どもの姿・あそび・気持ちについてたっぷりお話をさせていただき、共感したり、意見を頂いたり、実になる大会でした。改めて、子どもにとってあそびは大切なことで、関わる上で気持ちによりそい、小さなことでも褒めてあげる大切さを学びました。

担当者から

児童館・児童クラブの役割である『遊び』がテーマということで、単に遊びのネタを提供するだけではなく、参加者自身が楽しむ中で子どもにとっての遊びとは何かとい

う本質を考える分科会にしたいと考えました。自身の遊び体験を思い出し、自ら楽しみながらあらためて遊びについて考えました。そして、今の子どもたちの遊びに関する悩みや気になっていることを共有し、遊びのアレンジを考え情報交換をする中で、参加した皆さんにとっての新たな“気づき”を得る機会となれば幸いです。子どもを取り巻く環境が変わった今、大人の関わり方が子どもの遊びに影響があることを私たちは日々の活動の中で実感しています。本来は子どものものであるはずの『遊び』が、大人が関わることによっておもしろくなくなったり魅力が減ってしまったりするのであれば、大人は居ないほうがいいのかと思います。時には、大人がルールを決めたり制限を加えたりする場面もありますが、「本当に子どもたちのためか、それとも大人の都合ではないか」ということを一旦考えてみるが必要ではないかと、私たち自身、日々の自分の立ち方を振り返る機会になりました。児童館・児童クラブには、地域の中で異年齢が集う環境があります。子どもたちが本来持っている『遊ぶ力』を引き出し、子どもにとっての『魅力ある遊び』が展開できるように、私たちは言葉をかけ、環境を整え、見守り、時には一緒に遊び、その場その時でそこに居る子どもたちに関わっていくことが大切だと思います。もっともっと、遊びを豊かにできるように、まずは私たち大人が遊び心を忘れずに子どもたちと向き合っていきたいと思います。

担 当

岩手県社会福祉協議会児童館部会

分科会 K

「入園までが子育て支援？ ～児童館だからできる18歳未満の子育て支援～」

分科会Ⅰ 12月14日 16:00～18:00

分科会Ⅱ 12月15日 9:00～11:00

4階 小会議室 403



「子育て支援」は0歳から3歳までとっていませんか？子育ては未就園児まででなく、学童期、思春期と子どもの成長とともにその悩みは変化し尽きることはありません。0歳から18歳の長いスパンでかかわれる児童館だからこそできる子育て支援の意義があるのではないのでしょうか。この分科会では「児童館だからこそできる子育て支援」を話し合い、児童館らしい子育て支援を探っていきましょう。

内 容

■1日目

- ・アイスブレイク（フリップトーク）
- ・グループワーク（KJ法）
- ・まとめ

一日目は、5～6人で構成された4グループが「児童館の子育て支援で大切にしていること」「実際にやっていること」「子育て支援への思い」などを話し合いました。出し合った意見をグループ化し、その中でひとつ「キーワード」を決めました。

1. グループディスカッション

①グループ名：ツリー

【キーワード：居場所】

児童館の子育て支援で大切にしていることでは、ずっと見てくれているという信頼関係や、「指導」ではなく「寄り添う」などの意見が出ました。0歳から18歳までの子育て支援への思いでは、「あそび」だけではない社会に出ていくための支援、「安心」「安全」な居場所を作ってあげたい、地域の大人で子どもを育てる意識作りなどがあがりました。

②グループ名：トナカイ

【キーワード：輪】

地域の方との交流やコラボイベント、親子イベントなど実際にやってきたことを話し合いました。子ども同士、親同士、親子、地域との関係を大切にしている意見や、普段の関わりから信頼関係を築いている意見に全員が共感を持つことができました。そして、0歳から18歳までの子育て支援への思いは、切れ目のない関わりができること、連携、パイプ役にな

るなどの意見がでました。

③グループ名：ブーツ

【キーワード：こみゆにけーしょん】

それぞれの問いかけに対し、初対面時の対応やメンタル面での対応、仲間作りの手助け

地域との連携・交流など、つながりや尊重を主とした意見がたくさん出ました。

児童館のかかわりの中で安心して来館でき、来館を重ねることで生まれる信頼が大切であるということが共通していました。キーワード：こみゆにけーしょんは、カタカナではなく柔らかなイメージの「ひらがな」表記になりました。

④グループ名：スノーマン

【キーワード：つながる】

0歳から18歳までの子どもの健全育成は将来の大人を育てていることでもあり、次世代の子育て支援につながるものです。

居場所は、人がつくるもの。子どものため、親のためだけではない支援をし「いいつながり（いい循環）」を続けていこう！という意見がでました。

■2日目

- ・アイスブレイク（お誕生日チェーン）
- ・前日まとめ
- ・グループワーク（ワークシート作成）
- ・まとめ

一日目で提案された「キーワード」を実践するために、どのような活動を、どのような方法で実施するのかを具体的な企画を話し合いました。提案や思いを出し合いながら、ワークシート「児童館の木」を完成させました。またその過程に

おいて、児童館で一番伝えたいこと、大事にしたいことを共有しました。

1. グループディスカッション

《ワークシート「児童館の木」内容》

○キーワード

「居場所」「輪」「こみゆにけーしょん」

「つながる」

○コラボ対象

交流することが少ないと思われる年齢層を意図的に設定

○どんな活動

キーワードを実践するための活動

○私たちにできること

実践するために支援者ができる援助

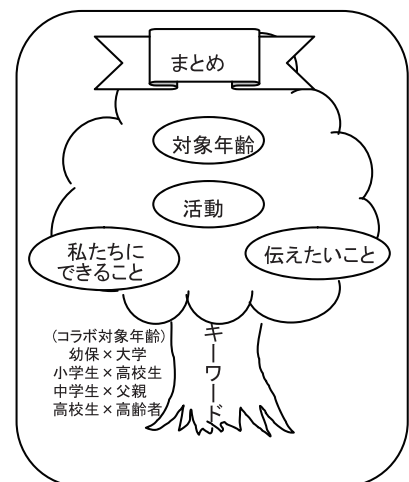
○伝えたいこと

この活動を通じて伝えたいこと

○まとめ

活動のまとめ

（ワークシート）





《グループで考えたそれぞれの「キーワード」を実践するための企画》

グループ	キーワード	コラボ対象年齢	どんな活動	私たちにできること	伝えたいこと	まとめ
ツリー	居場所	幼保×大学生	なりきり親子体験	○大学生との関係作りをする ・子どもたちと大学へ遠足に行く ・読み聞かせや遊んでもらう ・保護者とも情報交換をする	(大学生には) ・いつか親になることを感じ、親の気持ちを知り、子どもとかわる楽しさを知る (幼保親子には) ・大学生を身近に感じ、将来の自分の子どもへの夢を描く (地域には) ・様々な世代が集うこと知らせる	・今までにないコラボ対象であり、お互いがスムーズに信頼関係を築く方法が課題となる。児童館は様々な世代の出会いの場であり、その出会いをプロデュースすることが安心できる「居場所」作りにつながると考える。
トナカイ	輪	中学生×父親	キャンプ大会 スポーツ バーベキュー 木工工作 シャベリ場 キャンプ ファイヤー	○父親や中学生が足を運びやすい環境作りをし、来館が当たり前になるようにする ・中学生・父親の事業計画 ・関心をもてるポスター・キャッチフレーズも大事である	・「協力・コミュニケーション」→「挑戦・体験」→「達成感」を感じる ・お互いを知り、存在を認め合う (父親には) ・様々な子どもがいて当たり前、それぞれを受け入れる→大人の本気を見せる (中学生には) ・父親って頼りになる！を知らせる	・思春期の中学生と父親ができるだけ自然にかかわれるように配慮する。お互いの得意分野を活かせる内容を盛り込むことにより、存在を認め合えるようにする。また、父親の参画には、母親の協力が必要であることに気づき、母親・父親をどう巻き込むかが課題であると考ええる。
ブーツ	こみゅにけーしょん	小学生×高校生	一緒に企画・活動する	・児童館では高校生が必要であることを伝える→高校生が企画運営する ・スムーズに企画運営できる雰囲気作りを大切にする ・地域に広く広報し児童館のPRをする ・築いた絆を絶やさないようにする	・高校生の知恵や技術を伝えることにより、尊敬の念を持ち、また高校生には思いやりの気持ちを育てるようにする ・児童館で楽しく遊ぶためのルールが社会のルールにつながることを伝える	・安心や尊重を来館者に感じてもらい、それにより人間関係が確立する。親支援や子ども支援を通じてつながり、メンタル面での対応・地域の協力・連携に発展すると考える。そこには、職員一人ひとりが広い視野をもつ事が大切である。
スノーマン	つながる	高校生×高齢者	文化祭のようなお祭り	・高校生と高齢者の架け橋になる→人と人との架け橋になる ・積極的に地域活動に参加する ・地域資源を発掘する→(場所・協力者など)	・地域でつながることで幅広いつながりができる ・つながることで、それぞれの存在を認め合い輝く ・年齢は異なっても自分ができることで誰かを支えられることを知り、自分も楽しめる	・互いの得意分野を活かし、発表したり伝えたりすることで、存在を認め合えるのではないかと考える。世代を超えて多様な人がつながっていきける橋渡しをしていくことが大切である。子どもが親になっても人とつながっていけるような大人になってほしい。

参加者人数

- ・一日目 31人
- ・二日目 26人

参加者の声

・滋賀のスタッフの方々から学んだことがあります。明るさと「おもてなし」に温かい気持ちになり、とても居心地の良い空間で学ぶことができました。学ぶには、生きていくには、環境作り（空間）が大切であることを実感できた良い機会になりました。児童館に帰り、子どもたちに心地よい空間を提供できるように、チームワークを大切に励んでいきたいと思っています。

・未就学児までではなく、小・中・高校生が集える児童館にしていきたいです。

・滋賀県のおもてなしが何え、温かなお茶でホッとできました。帰ったらおもてなしの気持ちを忘れず、来館者につながっていききたいです。

担当者から

「子育て支援」をテーマに分科会を担当することとなり、「児童館だからこそできる子育て支援」ってなんだろうと何度も話し合いを重ねました。また「児童館」そのものについても真剣に考えたこの大会でした。

皆さんと一緒に、子育て支援や児童館に対する熱い思いを語り合い、具体的な活動を企画したりしながら導き出したのは、「児童館は、長いスパンでの子育て支援ができ、子どもも親も支援していける児童健全育成の最前線の場」であり、また「親と子、地域とが良好な関係を築くための橋渡しをし、子育てしやすい地域作りの拠点となることが大切」であるということでした。そのためには「誰もが安心でき、また行きたいと思える児童館をつくること」そして「そこにいる児童厚生員が心の居場所になること」そのことが全ての子育て支援につながる第1歩となるのではないかということを通理しました。私たち自身が心の居場所となり、子ども自身が伸びようとする育ちを見守り、支えていくことが大切だと学びました。

この二日間の分科会は、全国の仲間と出

会い、語り合い、交流できたとても有意義な時間でした。悩んでいたのは私たちだけではなく、皆さんも同じ問題意識をもち、子育て支援の根底に流れる大切なことを共有できた貴重な時間でした。温かい皆さんのご協力があったからこそ有意義な分科会になりました。感謝の気持ちでいっぱいです。

やっぱり児童館の仲間は最高ですね。全国にこの仲間がいるからこそ、日々頑張れます。私たち児童厚生員も児童館が自分たちの「居場所」！

担 当

滋賀県児童館連絡協議会





分科会 L

防災・減災・受援力～すぐに使えるよろず知恵袋～

分科会 I 12月14日 16:00～18:00
5階 研修室 A



今でしょ！ あなたの児童館・児童クラブに備えはありますか？ いざという時、子どもたちを守れますか？ 事例をもとに一緒に考え、みんなでよろず知恵袋に詰め込みましょう。

【助言者】

高橋 達男氏（仙台市児童相談所長／宮城県社会福祉士会常務理事・事務局長）

分科会内容

1. 分科会の趣旨・ねらい

備えや対策によって災害発生時における被害を少なくすることはできるので、日常のかつ継続的な災害対応への取り組みは重要です。しかし、それを実践していく為には、職員が防災や減災、受援力についての認識を深め、施設としての実践力の向上が求められます。

そこで、アイデアのまとめ、プログラミング、楽しみながら防災の感覚を培う遊び等、即実践につながる体験的な活動や、児童福祉の見地からの考察を通して、災害と子どもの育ちについての見識を広げ、地域とのつながりの大切さについて考えます。

2. 神戸からの実践報告

“いつでも・どこでも・誰でも”をコンセプトとして、防災・減災・受援力の重要性を日常的な活動としてカタチにしていけることを目的に、神戸の児童館や地域活動の中で試行実施を重ねました。その実践の様子や情報収集から得られた情報をまとめ、報告させていただきます。

まずは災害に対する概念を広げ、身近な問題として感じられるようなベースを確認することからスタートしました。次に、実践報告の後で行うグループワークでのヒントになるよう、児童館・児童クラブでの実践では欠かすことのできない“遊び心をそそることができる楽しい体験”を一義的に考えて事例を紹介しました。小学生を対象とした実践内容を中心として、中学生や乳幼児を持つ保護者との取り組み、施設単独行事、地域行事への参加や地域との連携や

協働による事例を、視覚的にイメージできるようにしました。

神戸での実践成果としては、多くの情報を得られたり新しい取り組みの広がりができたりしたことに加えて、その過程で出会えた人たちとのつながりができたことが大きかったのですが、参加された方々が実践されていくときも、きっとそれ以上のすばらしい出会いが生まれるだろうと期待が膨らむ、真剣なまなざしでした。

3. 児童館・児童クラブの防災・減災・受援力行事をプログラミングしよう！

実践報告を受け、次に『①児童クラブで実施可能な②防災・減災・受援力をテーマにした③楽しみながらできるプログラム』をミッションに、模造紙1枚にまとめるグループワークを行いました。制限時間は1時間。スタート早々より初めて集ったメンバーとは思えない速さでアイデアの応酬があり、次々と出てくるアイデアを整理したり、「タイトルに“避難”って入るのは、東北ではまだ・・・」といった真剣なやりとりをしたりしながら、作業が進んでいきました。

「防災すごろく」を提案したグループでは、初めに「自然災害の経験がない地域は防災に関する意識が低い」「毎月の避難訓練がマンネリ化している」などの悩みを出し合い、近年は竜巻など未経験の災害にあって危険性が高まっていることを確認し、災害に対する感性を高めるゲーム感覚のプログラムを考えました。「すごろく」は、空間があれば、防災・防火・防犯など、様々なテーマを設定して実施できます。早速、児童館へ帰って実施してみたいと、メンバー全員がわくわくしながら作業を終えま

した。

どのグループのプログラムも興味深いものばかりでしたが、作業の過程での話し合いや、短時間に成果物を仕上げた達成感に大きな収穫がありました。

グループワークは1日目でしたが、2日目はこれを使ってポスターセッションをし、グループワークを体験できなかった参加者へ情報提供しました。大変熱心に見聞きしていただい、1日目と2日目をつなぐ有意義な内容となりました。

4. ワークショップ

(1) 愛のミルク

阪神淡路大震災後、神戸市の備蓄倉庫には缶の上を押すだけで中のお湯が沸き、粉ミルクを入れるとすぐに赤ちゃんに飲ませることができる“愛のミルク”が備蓄されています。処分前のミルク（災害備蓄物資は消費期限前には入れ替えて廃棄処分）を有効利用し、子育て世代の母親達が一緒に減災について考えることのできるプログラムを考えました。「避難所はどこ？」「ご主人が工作中、避難の手助けをお願いできる方は？」と、問いかけながら、ミルク作りの実習をします。参加者から「ミルクを飲む子どもの顔を見ていると、この子を守らなければと感じる」ということばが聞かれ、体験的なプログラムが助け合いを学ぶ機会となり、大きな成果が得られました。

今回のワークショップで紹介したところ、「初めて知った」「自分たちの市町村でも設置して欲しい」という声を多くいただきました。「愛のミルク」のプログラムをヒントにして、児童館における災害啓発活動が各地域で広がっていくことに、大きな期待と手ごたえを感じることができました。

(2) 防災ダック

「防災ダック」は、子どもが危険な場面に遭遇した時とつさに動けるよう、「最初の一步（ファーストムーヴ）」を実際に体を動かし、声を出して身につけるためのゲームです。ルールは至って簡単ですが、導入部分で「わたしが「防災！」と言ったら「ダック！」と答えてね！防災！」「ダック！」「防災！」「ダック！」「白菜！」「…！」など「船長さんの命令ゲーム」的なやりとりを加えたり、『防災』の言葉の意味をクイズ形式で考えたりして、現場でより使いやすくするためのワークショップを行いました。参加者も交代で指導者役を体験し、「1回に使うカードは4～5種類くらいだね」「児童クラブでは、どのくらいの頻度がいいと思います？」「他のカードを上手に隠していないと、子どもが混乱するね」など、体験したからその意見や質問も次々と出て、動きも声も一番賑やかなワークショップでした。

(3) どっちかな!?ゲーム(クロスロードゲームアレンジ)

阪神淡路大震災の体験からつくられたクロスロードゲームは、どうしようかとジレンマが生じる状況下で、YesかNoかを選択するカードゲームです。一人ずつ選んだ理由を話しますが、「同じです！」は無しがルール。多い方を選んだら座布団がもらえますが、多い方がよいのではなく、必ず自分のことばで話すことが大切で、ただ一人の選択カードを出した時は豪華“金座布団”がもらえるのも魅力です。

「あなたは避難所の責任者。大活躍の学生ボランティア男女が仲睦まじく……。注意する？」などの体験で、短時間でゲームの世界に入り込み、各自の意見にうなずきながら傾聴されている様子に、さすがは児童館・児童クラブの職員と感心させられました。子育て編等設問に応用が利くこと、小学校低学年向けに設問を紙芝居で表すアレンジゲーム「どっちかな!?ゲーム」を紹介し、最後にクロスロード研究会からのお土産として、気仙沼の風景がデザインされたYes/Noカードを配布させていただきました。

(4) すぐに使えるよろず知恵袋

神戸の児童館で日常的に防災のために実施している事例を集め小冊子・ポスターにして見本よろず知恵袋として会場内で配布やポスター掲示しました。

全国の児童館・児童クラブではこんなこともあると思いついた事例をすぐにフォームに記入してもらい、参加者の知恵を掲示して情報共有しました。全国へ持ち帰った知恵袋を実践することが防災への大きな成果につながるようになるでしょう。

5. トークセッション

仙台市児童相談所長 高橋達男氏をゲストにお迎えして、神戸市 村田一実総合児童センター所長のリードのもと、Q&A形式で対談が進みました。

横浜の新任児童相談所長研修会での出会いから7年、重責の児童相談所長の仕事に現在もついておられることに敬意を表しつつ、ともに大きな震災を体験した政令市の児童相談所長としてのお立場で、分科会を振り返っていただきました。

Q1 震災から1000日が経過、仙台市児童相談所長としてどのようなことを想定してご準備されていたのでしょうか。当時を回想するとどうですか。

A1 まずは被災地のこどもの受け入れです。

一時保護所の定員枠を通常の20人から別枠で40人を増員し、受け入れ整備をしました。

被災地の先輩新潟市からの職員応援の約束（保育士20人待機）、次に直接被害の学校（9校）へ臨床心理士たちをスクールカウンセラーとして応援派遣しました。

当時を振り返ると「茫然自失」という言葉で表せると思います。

Q2 震災当時、被災県・市と国が頻繁に会をもたれ、様々なことを協議されていたと伺いましたが、どんなテーマや議題が上がったのでしょうか。

A2 震災後すぐに厚労省の専門官や担当者と会合、一時保護所の臨時増員分と養護施設等への超過入所分についても措置費を認めてもらうよう要望しました。

Q3 最近こんな問題がでてきている。など変化を感じられることは。

A3 震災直後、村田所長から神戸の資料が届き、震災後の児童の状態を勉強しました。

当面助かった子どもたちにも、数年後にいろんな反応がでてくると学び、いずれはいろんな問題がでてくるということは覚悟していましたが、案の定、少しずつ、不登校の児童が増えてきたのです。避難と転居など生活と気持ちが落ち着かないことがベースにある、それらにきちっと対応しい

ていかなければと思っています。

Q4 昨日からの分科会等に参加されて印象に残っていること、受援力についての感想を。

A4 「自助・公助・共助」は重なりあい連携してこそ意味があり、受援力は関係の在り方が大切で、我々こどもたちに関わるものとして、共助を作っていく源は「絆」。人と人とが出会い、この瞬間に絆が深まっていく。絆という文字があらわすように、糸をより合わせたとき、長さも太さも同じ対等の関係でこそ、よい絆ができる。

絆があるかないか、それはこどもたちの今を見ればわかるんです。

絆→KIDS NOW！（キッズ ナウ）というわけです。

受講者からの絶賛の拍手・歓声で会の幕が降りました。

参加人数

14日 26人、15日 37人。

参加者の声

- ・重いテーマを選んでしまったかなと思っていましたが、クロスロードや防災ダックなど、子ども達が関心を持ちやすいワークショップで、「防災を楽しみながら学べる方法」がわかりました。
- ・愛のミルクは、実際震災の時に、困っていたお母さんがいたので、子育て支援などに知らせていきたいです。
- ・様々な方に体験してもらい、防災意識を高めてほしいです。
- ・地域の方々とのかかわりを深める取組も、考えていきたいです。
- ・素晴らしいトークセッションでした。絆「kids・now」絶対忘れません。という参加者の声をいただきました。

担当者から

阪神淡路大震災を経験した神戸だからこぞできる全国への発信ということで、この防災や減災、そして受援力というテーマについて取り組みました。内容構成は、即実践につながることを念頭に、①体験的な活動の中から気づきが生まれて行くこと、②受援力について考えていくこと、③アイデアの集約と共有化、の3点に配慮しました。

神戸で試行実施等の準備をしているときも感じましたが、防災への関心の度合いは



地域によって温度差がありますから、全国各地から集まる参加者と同じ目線で防災を語り合えるだろうかと、一抹の不安がありました。しかし、東北から九州までの参加者から、「実際に体験できたことがよかった」「ここで得た内容を、地元に戻ったら是非やってみる」という共感の声をいただくことができ、安堵しています。今後、全

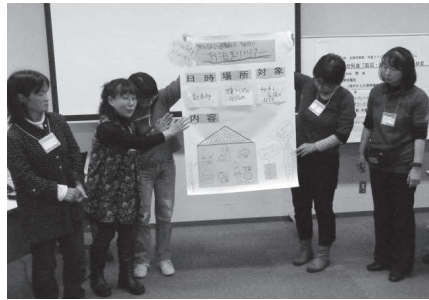
国の児童館・児童クラブの安全性が高まり、防災をツールとして地域との絆が深まっていくことを願います。

フォーラム終了後、神戸市内向けに報告会を開きました。また、次年度はこれをもとに防災に関する研修会の開催も予定しています。このように、今回の分科会運営への参加が、これ以降、神戸でも継続、発展

させていける貴重な機会となりましたことに感謝いたします。

担当団体名

神戸市社会福祉協議会



分科会 M

「ここには児童館があるぜ！

～中高生の居場所づくり～」

分科会Ⅰ 12月14日 16:00～18:00

分科会Ⅱ 12月15日 9:00～11:00

4階 小会議室 402A



あなたの児童館には中高生の居場所がありますか？地域との連携、児童厚生員としての関わり、中高生のボランティア活動など、悩みはたくさん！中高生を支援する観点から、児童館のあり方と職員の資質について考えます。

進行の概要

1日目

- ①日程オリエンテーション
- ②川柳の紹介
- ③グループ討議（KJ法）
- ④発表・質疑応答
- ⑤まとめ

2日目

- ①日程オリエンテーション
- ②架空の児童館「えひめ児童センター」の説明
- ③グループ討議
- ④プレゼンテーション・質疑応答
- ⑤まとめ

分科会内容

1日目（9名の参加）

問題提起

愛媛県内の児童館に中高生について回答いただいたアンケートを基に、大きく分けると3つの児童館に分類できるのではないかと、以下の通り川柳で表しました。

○児童館に中高生が来ていない

「児童館 卒業したが たまに行きたい」
「来てみたら ここにはなかった オレの居場所」

○来ているけど何もできていない

「中高生 初めてできた いきつけが」
「行っている？ 行っちゃだめなの？ 児童館」

○来ているけど課題がある

「児童館 行ってみたが 恥づかしい」

「今日も来た 俺は一日 何してた」

以上を踏まえ『中高生の利用を増やすためには？』ということテーマにグループ討議を行いました。

グループ討議

2グループ（タルトグループ・坊ちゃんだんごグループ）に分かれ、中高生を受け入れるための協議を行いました。参加者の勤務児童館の利用方法も様々なため個々の問題提起をKJ法において討議を行い、各グループより以下の内容等が考察されました。

■児童館における問題点

- ・構造の問題（幼児向けのスペースが多く、中高生が遊べない等）、開館時間（中学校の授業終了後、児童館を利用する時間が短い）、使用できる機材（運動遊具、趣味【バンド・ダンス等】）

■児童館職員のあり方

- ・中高生と明るく接し、相談しやすい人や頼れる人になること
- ・中高生の目線（男子・女子）で対応すること
- ・小・中学校や地域（民生児童委員など）との連携

■広報活動の在り方

- ・児童による口コミ
- ・チラシの配布、ポスターの掲示等
- ・インターネット、ブログ、フェイスブック、ライン等の活用

■児童館で取り組める中高生の活動

- ・バンド、ダンスなど発表ができる場所
- ・バスケットボール、卓球などができる場所
- ・児童館、地域のボランティア活動への参画

川柳の作成

中高生が児童館に来館してもらいたいための川柳を作成してもらいました。

《タルトグループ》

- ・中高生 悩んでいないで ここにこい
- ここにはあよ 君の居場所が
- ・地域にも 中高生にも頼られる センスと理解が 館の活力

《坊ちゃん団子グループ》

- ・来ていいよ 誰でも来れる 児童館
- ・あせらずに ゆっくり広める こどもの輪

まとめ

参加者の児童館も小型・センター・大型児童館など様々な形態の中で、中高生の居場所づくりについて協議を行ってもらいました。

年齢的にも、思春期や受験・部活等一番難しい環境に置かれている子どもとの関わりに対し、終始熱心にグループ討議を行いました。各児童館で中高生を受け入れてイベント運営や活動への参加などを行っている事例を参考にでき新しい発想も生まれてきました。また、中高生が児童館の周りにいて友だちなどと話しているけれど利用しない児童への対応や話し相手等、中高生に寄り添った職員も必要ではないかという提案も出ました。

参加者の方々は、中高生が少しでも児童館を利用しやすくなるよう話し合いを行っていましたので、今後は中高生が関わる新たなイベントを開催されることが期待されます。



2日目（18名の参加）

問題提起

仮想児童館「えひめ児童センター」は、職員数5～6名。来館者数1日100名程度。中高生は特に目的はなくふらっと来る感じ。中高生向けの設備は特になく、バスケ・卓球・パソコン・勉強などをしてすごしています。

ある日所管課から「えひめ児童センター」に『中高生の来館者を増やせ』と言われました。さあどうしますか？

プレゼン方法もプレゼン相手も自由です。時間内（60分）に来館者を増やす方法をグループで話し合い、プレゼンを行ってください。

グループ討議およびプレゼンテーション

《タルトグループ》

付箋に書いた案を、縦軸に短期的と中長期的、横軸にソフト面とハード面を置き分類

○短期的ソフト面

- ・中高生向けの事業（卓球・パソコン教室・スポーツ交流イベントなど）の開催→チラシやポスターを作成し中学校、高校へ配布
- ・ボランティアの募集

○短期的ハード面

- ・音楽スタジオをつくる
- ・得意なものを発表できる場を設ける（音楽スタジオなど）

○中長期的ソフト面

- ・開館時間延長
- ・行事の中心に中高生をリーダーとして置く
- ・中高生と赤ちゃんのふれあい
- ・ボランティアの育成

○中長期的ハード面

- ・駄菓子など軽食販売ができるようにする
- ・設備の充実（バスケ・バドミントン）
- ・こたつを設置
- ・充電OK（スマホ・DS）

設定／所管課へポスター形式でプレゼン

- ① ～こたつでのんびり～おしゃべりしませんか？…来館しやすい環境づくり
- ② 携帯・スマホ・DSなどの充電OK！充電中に勉強したり、マンガを読んだり、おしゃべりしたり、スタッフのお手伝いをしたり…児童館に来るきっかけ
- ③ ①と②で慣れ親しんでくれたら「地域ふれあいイベント」を実施・・・中高生が軸になって、地域の人や商店街

を巻き込み活躍する場所を提供

《みかんグループ》

付箋に書いた案を9つに分類

① コミュニケーション

- ・短い時間でいいから会話を密に行う
- ・勉強しているか？と言ってみる

② リサーチ

- ・今来ている子たちにやりたいことを聞く
- ・アンケートをとる
- ・ふらっと遊びに来た子が遊んでいることを行事化
- ・子どもたちで会議

③ 専用の時間・空間

- ・中高生の使用できる時間帯を決めて広報
- ・次に来たいと思えるように事務室の近くに中高生の空間を作る
- ・飲食OKスペース

④ 中高生のための行事

- ・野外活動を定期的に行い、小学生向けのイベントリーダーになってもらう
- ・夜間利用のバスケ、卓球イベント
- ・年4回21時まで残れる時間を用意する
- ・季節行事を行う

⑤ 学校との連携

- ・学校の年間計画をもらう
- ・中高生の部活にイベントのボランティア募集を行う

⑥ 自分たちで行う企画運営

- ・職場体験の場
- ・ミニ祭り、卒業パーティー、ダンス、バスケ、卓球大会を企画運営する
- ・部活の楽しさを小学生に教える体験コーナーをつくる

⑦ 本物にふれる、プロと出会う

- ・劇団ミュージカルのワークショップ
- ・大学生のバスケットチームと一緒に練習
- ・本格的クッキング

⑧ 職員の努力

- ・職員の育成

⑨ 自己肯定感の育成

- ・地域の人々がほめてくれる機会をつくる
- ・参画したイベントの振り返りを行い、充実感や満足感を得る

設定／所管課へページめくり方式でプレゼン

9つの分類を簡単な言葉に置き換え、伝わりやすいように絵と文字で発表していただきました。

《坊ちゃんだんごグループ》

付箋に書いた案を画用紙に拡大記入

- ・なにか食べたい
- ・マンガをよんでだらだらしたい
- ・ゆっくり勉強したい
- ・みんなでいろんなおしゃべり
- ・きみは何がしたい？
- ・児童館は18時～20時あいてるよ！
- ・バンド
- ・きみとスタッフで新しい自分の居場所をつくろうよ！

設定／中学校と高校へ学生向けにプレゼンひとりひとりがパフォーマンスをしながら、楽しくプレゼンしていただきました。

全体を通じて担当スタッフより

2日間の分科会を通して、共通の悩みを持った全国の職員の方の貴重な経験談や問題解決に向けてのアイデア等をお聞きすることができました。

どの館も幼児向けの作りになっているため、中高生向けの部屋を確保することが難しかったり、思春期という特徴ある時期の子ども達への対応が難しかったり、中高生が遊べる物を用意できていなかったりと、ハード・ソフト両面で様々な問題を抱えているというのは参加された皆さんの共通の悩みのようなものでした。

分科会を通じて、児童厚生員らしい柔軟な発想とアイデアでそれらの問題解決に向けて一歩近づいたような気がしています。

来館しやすい環境づくりの一環として館内にこたつを設置する、また携帯・スマホ・DSなどの充電をできる機器を整備する等、斬新にしてすぐに実施できそうな取り組みも多数出されました。

これらの中高生にとって過ごしやすい環境作りを行っていくと同時に、中高生たちを巻き込み、また中高生が主体となった各種活動を行っていくことで児童館全体の活力の底上げが図れるのではないかと思います。

今回の分科会で得たものが全国の児童館での中高生の居場所づくりのために少しでもお役に立てれば幸いです。

担 当

愛媛県児童館連絡協議会

やっちゃんけん愛媛の児童館職員等研究会



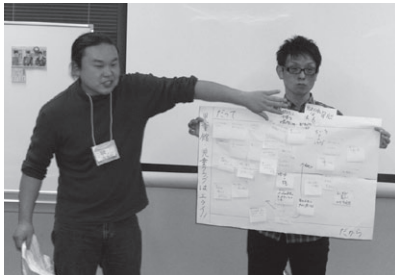
分科会 P

「ヒト言」「ヒト目」で伝えてみよう～ 児童館・児童クラブのPR大作戦！

分科会Ⅰ 12月14日 16:00～18:00

分科会Ⅱ 12月15日 9:00～11:00

5階 小会議室 501



大好きだから伝えたい児童館・児童クラブのこと。
今まであたりまえすぎて気づかなかった児童館・児童クラブのイイトコ探しから
「ヒト言」「ヒト目」で伝わるCMづくりまで。
アナタの広報力、スイッチon!!

分科会内容

☆1日目

①分科会の主旨説明

児童館、児童クラブのこと人から聞かれた時、上手に答えられているでしょうか。

子ども、大人、地域に対して、それぞれ適切な説明ができていますでしょうか。

伝えたい思いが強すぎて相手のことが考えられなくなってしまう説明、これで伝わっただろうと思って伝わっていないことがあります。

そこで、今まであたりまえすぎて気づかなかった「児童館・児童クラブの魅力」を見つけて、児童館・児童クラブの伝えたいことを「ヒト言」「ヒト目」で伝えてみよう。そして、それをCMにしてみようというのがこの分科会です。

②「広報」についてのプレゼンテーション

身近なところで思い浮かべた「広報」とは、毎月発行されている地元や勤めている市町がだしている『広報』の冊子です。広報には、住民の皆にとって役立つ情報がたくさん載っています。最近ではインターネット上にホームページが設けられていつでも何処でも情報を知ることができる便利な時代になりました。このように、さまざまな情報をメディアを通じて皆に伝える窓口としての広報の役割は、『社会とつながりをつくる』『PR』機能として大きく期待されているところ です。

このことを児童館や児童クラブに置き換えると、認知度や信頼感の向上のためには、現場にいる自分たちで児童館・児

童クラブの価値や魅力を、いろいろな媒体を使って広報していくことが必要だということになります。何を広報するかという、児童館の「本質」を捉え、今まで気がつかなかった「価値」を探すことをしなければなりません。

有川浩著「県庁おもてなし課」の中に『キャッチコピーがはまっているってことは、その商品のセールスポイントを的確に把握しているってこと。セールスポイントを自覚している商品と、してない商品とじゃ雲泥の差だ。』というくだりがあります。

効果的な広報のためには、①本質・魅力を考え直し、②児童館・児童クラブを好きになってもらうために伝えたいキーワードを考え、さらに③そのキーワードを誰もが二度見するようなキャッチコピーへ『変換』する作業が必要なのではないでしょうか。

また、もう一つ大切な視点として「伝える相手」を意識することがあります。伝える相手によって伝える内容や伝え方を決めていくことが大切なのです。

伝わっていない、これが現状なのではないでしょうか？今までも思いがあったのだけど、「どんな人にどんなことをアピールしていったら有効か」がうまく理解できていなかったのかもしれない。

《参考文献》

「空飛ぶ広報室」
「県庁おもてなし課」有川浩
「伝え方が9割」佐々木圭一
「広報スパイスブック」
児童健全育成推進財団

これらは、いつでも見ていただけるように分科会会場におきました。

③グループワーク

グループワークは、所属の属性によって3～5人の3グループに分かれて行いました。

- 1) 「○・×・△」はエライ！！…ウォーミングアップとして、「○」「×」「△」のPRを考えました。
- 2) 「児童館・児童クラブ」はエライ！！…児童館・児童クラブの本質・魅力を再発見するために、どんどん出し合いました。
- 3) 伝える相手（ターゲット）決め…くじ引きで、グループごとに「子ども」「大人」「地域」と決めました。
- 4) 「児童館・児童クラブのエライ！！」をキャッチコピーに変換

【例】

児童館のエライ！



無料・冷暖房完備



伝える相手



地 域



キャッチコピー



『無料！暑い日でも寒い日でも大丈夫』

- 5) グループごとにイチオシのキャッチコピーを作る

どのように話し合いがされ、イチオシのキャッチコピーが出来たかを合わせて発表してもらいました。

	Aグループ (児童クラブ)	Bグループ (児童館・児童クラブ併設)	Cグループ (児童館)
児 童 館・児 童 ク ラ ブ は エ ラ イ	・いろいろな体験ができる ・一人っ子でも兄弟げんかができる ・専門知識がある地域の連携のきっかけになる	・学校でもない、家庭でもない第3 の顔が出せる場所 ・いつ来ても、いつ帰ってもいいから ・安心・安全だから	・だれでも利用できる ・いつでもあそべる ・おとながいる ・異年齢であそべる
タ ー ゲ ッ ト	地域	大人	子ども
キ ー ワ ー ド	子どもが喜ぶムダ知識+様々な特技 あり+学校も安心	子育て支援+あそびば+安心・安全+ 異年齢	いろんなあそびができる+集まれる 場所+だれでも〇〇キングになれる
キャッチコピー	—あそびのプロ、そろってます。—	大人のしゃべり場子どものあそび場 「子育てスッカリ★ステーション」	今、児童館がアツイ！ 君はどこまで楽しめる？

④1日目のまとめ

グループワークの中から、新しい児童館、児童クラブの価値、魅力を発見しました。

伝える相手（ターゲット）を絞り、伝える内容や伝え方を考え、児童館、児童クラブをどんな人にどんなことをアピールしていったら有効なのかを再確認し、広報について理解を深める一歩になったと思います。

☆2日目

①1日目の振り返り

1日目は、「児童館・児童クラブ」の魅力について話し合いました。各グループから出た「エライ」について、話し合いを深め、伝える相手を決め、それに合った伝わる言葉を熟考しました。そして、広報の土台となる「キャッチコピー」「ターゲット」「伝えたいこと」が決まりました。

②CMづくり

CMづくりには、Windows Live ムービーメーカーを使用しました。

1) フォーマットづくり

CMの土台となるフォーマット用紙を作成しました。

＜ルール・留意点＞

- ・「タイトル」「ターゲット」「伝えたいこと」を記入
- ・写真の選定（写真データは、あらかじめスタッフで80枚準備しました）
- ・曲の決定（あらかじめ全曲1分30秒に編集）
- ・最大18コマで作成
- ・1コマには「写真と言葉」「写真のみ」「言葉のみ」のいずれかを選択して作成し

18コマにします。

2) ムービーメーカーにデータ入力

③CM鑑賞

3グループの出来上がったCMを全員で鑑賞しました。

1) CMの感想

- ・広報を意識したことで、相手に伝わりやすい言葉を選んで作られていた。
- ・2日間かけて話し合った集大成として、児童館・児童クラブの良さが伝わるCMになっていた。
- ・児童館・児童クラブを知らない子ども達にターゲットを絞ったCMは、楽しさ、面白さがよく伝わるように写真や言葉を有効に使っていた。

④2日間のまとめ

1日目に、児童館・児童クラブの魅力について話し合いを行い、誰に伝えるのか、どう伝えるのが有効なのか広報ということについて考えました。

2日目は、90秒のCMという形にしていく作業をしました。伝わるキャッチコピーを選び、3つのグループがそれぞれ伝える相手に向けたCMができあがりました。2日間を通して「どんな人に、どんなことをアピールしていったら有効か」を理解し、広報していくことの大切さを学びました。

参加者数

19名（スタッフ含む）

参加者の声

- ・何人か集まると、それぞれの考えていることが言葉になり、ひとつのテーマに対しても様々な切り口でアイデアが生まれて、楽しかった。自分が普段使ってアピールしている言葉以外での表現が知れたことが、お土産です。
- ・普段の業務では考えない視点で、どう見られているか考える機会があって良かった。

・違う地域の方と意見を交わしてひとつのものを作る作業は、新鮮で面白かった。地域は違って共感できることがたくさんあり、また参考にすべき意見もあったので日常の業務に役立てていきたい。

担当者から

この分科会を開催するにあたり私たちは、「児童館・児童クラブ」の魅力について話し合いを重ねました。こんなにたくさん良いところがあって、こんなに真剣に子どもと向き合っている大人がいる「児童館・児童クラブ」を、多くの人に知ってほしいという強い想いがありました。

伝わる広報は、どこに焦点をあてて、どんな考え方をして、どんな方法が有効か、話し合いを重ね広報について学びました。その中で、地域性を含め相手の求めていることを探りながらPRしていくことが必要だと思いました。

広報によって、地域にある様々な社会資源とつながりまた別の動きが生まれ、それを子どもの健全育成に役立てていけたら「子どもが大好きな」私たちにとってこんなに嬉しいことはありません。

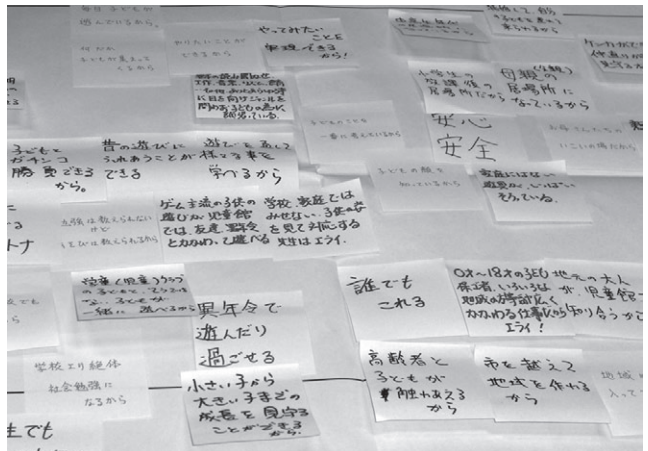
この2日間話し合われたことを、各施設で「広報」していただきたいと思います。その中で「もっとPRしていきたい」「こんな方法でPRしてみたい」など、活発な意見交換がなされることを心から願っています。

参加者の皆さんの笑顔とご協力で楽しく実りある分科会になりました。また皆さんにお会いできる日を楽しみにしています。本当にありがとうございました。

3つのグループが作成したCMは、後日参加者に送付しました。

担 当

愛知県児童館連絡協議会



分科会 Q

トークバトル 児童館の値打ち

～大航海時代への序章～

分科会Ⅰ 12月14日 16:00～18:00

分科会Ⅱ 12月15日 9:00～11:00

5階 研修室 B



様々な類似施策の台頭で、その存在意義が問われている児童館。今回ディベート形式を用いて、児童館の優位性を再認識し、大航海時代へ向けて新たなスタートをきります。(経験5年以上)

分科会内容

1日目

1、基調講演

中川一良先生（公益社団法人京都市児童館学童連盟 常務理事・健全育成子育て支援統括監）より「岐路に立つ児童館」としてお話をいただきました。子ども子育て関連3法についての概略や少子化、虐待問題など政府が進める施策の考え方、その中での児童館の置かれている状況等についてのお話しでした。強調された点は、児童館事業との類似事業が台頭する中、児童館が取り組む子育て支援や健全育成事業が決して児童館だけの特徴的活動ではなくなってきたこと、それゆえに児童館は非常に厳しい状況にあり、今後必要とされる児童福祉施策の中に生き残ることができるのかどうか、岐路に立っているとの点でした。この指摘はその後のトークバトルを展開する上での問題提起となりました。

2、トークバトル

ディベート方式を用い“5年以上の経験者”という参加枠を設けた分科会でしたが、児童館の優位性を語るために、我こそはと手を挙げた全国の精鋭たちが集まりました。対する京都陣営は児童館不要論をたっぷり用意し、「行政担当者役」「利用者役」に扮し、児童館に対する厳しい批判的な意見を投げかけ、両者が激しいトークバトルを展開しました。この1日目のトークバトルを通じて、児童館の置かれている厳しい状況を参加者すべてが共有することができ

ました。

まずは京都陣営から、児童館が得意分野としてきた各種クラブや広場などの「子育て支援活動」も、今や同様の活動を行う施設が多く地域に存在するようになってきた。児童館で行うより遥かに少ない予算で運営しており、しかも費用対効果の観点から大きな成果をあげており、もはや児童館は子育て支援活動を行う上での拠点ではないとの評価と指摘がなされました。

さらに、日常的な児童館での遊びを中心とした活動でも、時代遅れで古臭く、開館時間等の運営モデルも今の子どもたちの生活スタイルに合致しておらず、子どもたちにとって魅力的ではない施設だとの指摘がなされました。

この話を受けて、各グループでは反論のための作戦会議を実施し、参加者それぞれが京都陣営に対して意見をぶつけました。

参加者から出された反論の主要な論旨は、児童館は0～18歳までのすべての児童を対象としているので子どもの成長を長いスパンで見守っている。効率性だけの判断は間違っている。人間の成長は即効的な費用対効果だけで測れるものではなく、児童館の活動は次世代育成のため、さらに虐待問題等の予防的な働きや他の専門機関や地域とのつながりを作っている施設である。等たくさんの拍手に後押しされて述べられました。しかし、京都陣営からその役割は「児童館でしかできないのですか?」「他にもできるところはたくさんあります。」「お金が有り余っている時代ではないので、より多くの人のために効率よく役割を担う事業への投資はやむを得ない。」等の反論が重ねられ、議論は激しい意見の応酬を見せ、平行線をたどりました。ここ

までの議論を通じて見えてきた論点は「児童館らしさ」とは一体何なのか、「他の施設ではできず、児童館でないとできない役割」とは何かということであり、児童館の特徴としている「地域のすべての子どもを対象とした、異年齢集団の活動」「子ども支援、子ども育成」「子ども自身の意思での利用選択」がこれから児童館の魅力となり得るのかという点でした。これを意識して後半戦に突入します。参加者のトークも熱を帯び、熱いバトルが展開されました。しかし、具体的な事業の中身で魅力、優位性を語ろうとする参加者と、それは児童館だけの独自性とは言えないとする京都陣営との溝は埋まらず、あらためて児童館の優位性、独自性を事業の中身から語ることの難しさが明らかになりました。

3、1日目まとめ

児童館が危機的な状況に直面しており、その状況下で児童館らしさや児童館ならではの価値をどこに見出すのか。

児童館固有の役割を見出し、他と比べても児童館が優位であるものをしっかり説明できなければ現在の状況を打開できないことをそれぞれが実感しました。2日目は児童館の原点に立ち返り、児童館の固有性、優位性についてみんなで考えます。

2日目

1日目のトークバトルを経て、いよいよ船は大航海へと漕ぎ出していきます。前日のディスカッショングループに分かれ「児童館でしか…」「児童館ならではの…」をキーワードに据えて、前半・後半と時間を区切りながら、2段階で話しを深めました。



1、グループディスカッション「優位性・固有性」を考える！

3つのグループが、児童館の優位性・固有性につき議論を深め、以下のような意見が交わされました。

- ・児童館の特性は、0歳から18歳の児童が対象であることだ。
- ・保護者や地域の人々、高齢者との関わりにより「地域への様々な発信」ができる。
- ・児童を介して地域の人を巻き込み、事業の充実を図ったり、関わりを深めることができる。これこそが、児童館の職員が備えている「専門性」ではないか。
- ・利用者視点から見ると、地域において様々なサービスが存在することはよいこと。児童館は、保育所、サークル、児童委員、保健所等をネットワークで繋ぎ、連携をコーディネートする役割を担うことができる。これこそが「優位性・専門性」を見出す視点ではないか。
- ・施設利用の実態として、利用者が0歳～高齢者だという現状がある。児童館ではなく地域の「児老館」として、その活路を見出していく手段もある。
- ・専門機関にて措置等が施されるに至らないラインでの予防的な援助等を行うのが児童館の重要な役割であり「専門性」ではないか。

前日の「熱いバトル」から「和やかな雰囲気」へと様子を変え、時折笑い声も弾むなか、進んでいくグループディスカッション・・・参加者が各々の視点で、改めて「児童館の優位性・専門性」を真剣に見つめ直す時間となりました。

各々の意見を、全体レベルで考察する時

間では「優位性を発信する事が何より大切だと感じながらも、事業効果を数値化する具体的提示や手段で行き詰まってしまう。」という課題が浮き上がりました。

また「児童館を守るため、いかに残していくか・・・という話しに傾倒している。

児童館がなくてもいいのではないか・・・という視点から、子どもと保護者の幸せがどこにあるのかを追求すべきではないか。」という切り口の違った意見も出されました。

2、2日目まとめ

グループディスカッション・全体の共有を通し、提示された様々な意見を再度辿りながら、本分科会が討議により深めていった内容を確認共有し、司会者が以下のように取りまとめて、2日間にわたるQ分科会を終了しました。

- ・児童館の個々の事業内容から児童館の独自性を説明しようとしても、そのアプローチから説明することは難しい。
- ・児童館の健全育成を正面に据えた活動の多様性、総合性に「専門性」を探るヒントがあるのではないか。
- ・「児童館の優位性をどこに据えるか」しっかり論証していかないことには、児童館の衰退傾向に立ち向かえないだろう。

本分科会の2日間を通し、私達は、ここに問題意識をもち、荒波への航海へと漕ぎ出していきたい。

参加者の声

- ・「児童館にしかできないことって何なんだろう？」この大きな問いに対して、様々な切り口が存在することを知り考えさせられた。
- ・京都の分科会熱かったです。わかりやすく説得力を持って地域に必要とされる施設ということを、アウトリーチし理解しやすい状況を作る必要がある。
- ・真剣に考えながらも、ユーモアと笑顔を交えての進行のおかげで和気あいあいとした雰囲気でした。

担当者からの感想

京都チームでは「今こそ児童館の在りようを考える時」と話し合い、バトルトーク・グループワークという2種の形式で、本分科会を企画致しました。

月1回のミーティングを約1年間実施し、時には話しの軸が蛇行して苦慮することもありましたが、ようやく当日に漕ぎ着けました。

参加者の皆さんは、本分科会の趣旨をしっかりとご理解いただき、真剣な様子で私たちと、共に「児童館」を考え、大いに語って下さいました。本当にありがとうございました。

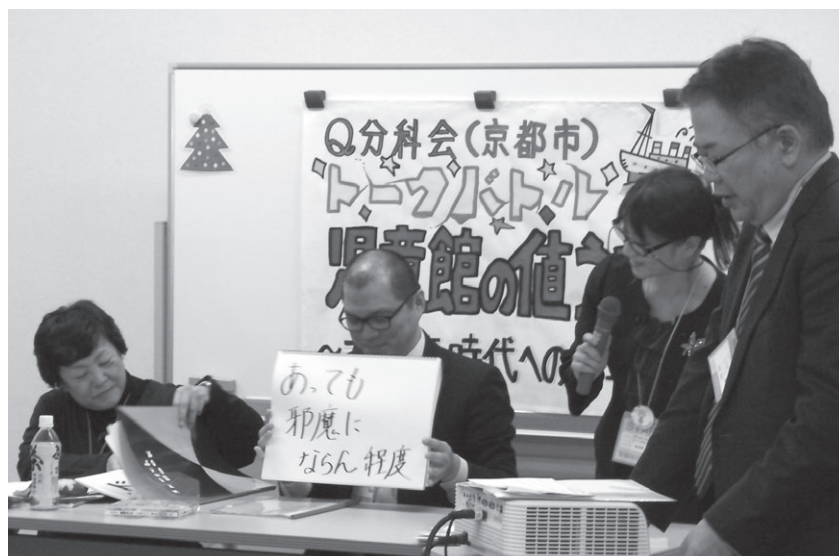
皆さんと共に絞り出した数々の児童館の可能性を、しっかりと胸に携えて、荒波の海へ出航したいと想います。

参加人数

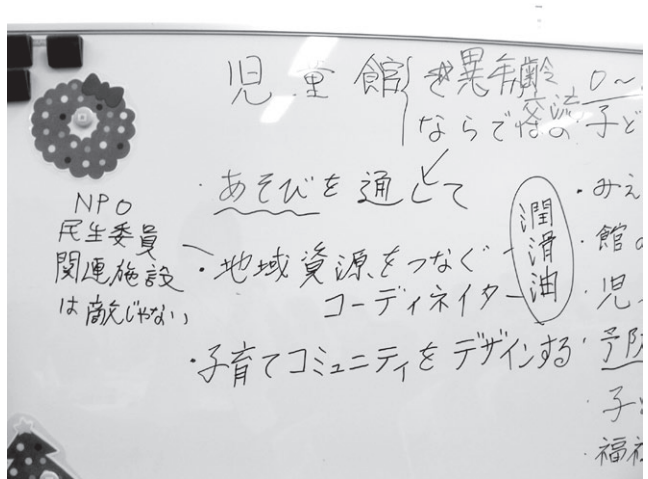
25名

運営協力

公益社団法人京都市児童館学童連盟



うん。だから、
ふくしまで。





分科会 R

「Re:born 〇生まれ変わる児童館 ～そのエビデンス（evidence）を考える」

分科会Ⅰ 12月14日 16:00～18:00

分科会Ⅱ 12月15日 9:00～11:00

3階 小会議室 302



児童館は利用する子どもや保護者と何を作ってきたのでしょうか。その成果や効果を表す方法を一緒に考えてみましょう。

【講師・事例発表者・コーディネーター等】

東京児童館・月イチ学習会 参加者有志

【講師・事例発表者・コーディネーター等の写真】

別途データ「コーディネーター写真」参照

分科会内容

■経緯 = 東京都児童館・月イチ学習会について=

東京都では、平成24年9月より、東京都の児童館関係職員が集い、児童館事業の実践報告や、児童館のあり方などについて互いに学び合う「東京都児童館・月イチ学習会」（以下、月イチ学習会）が開催されています。この学習会では、各児童館の実践報告や課題の共有、情報提供がなされており、児童館事業に特化した話題をテーマにして、参加者同士が所属を超えて意見交換を行い、児童館のあるべき姿を多角的に議論しています。

そのなかで、児童館が生まれ変わるために何が必要なのか、強いては、児童館が必要とされる根拠（evidence）とはなにか、というテーマが生まれました。月イチ学習会では、児童館ガイドラインなどを材料にして、視点を変えながら幾度も議論を重ねており、現在もその答えを模索しております。今回の分科会では、この月イチ学習会が課題とし、検討を重ねてきたテーマを全国に共有するとともに、新たな手法を用いて児童館のエビデンスを探り、児童館を見つめ直すというねらいをもって企画されました。

■1日目 = KJ法による分析=

1、趣旨説明

本分科会の趣旨を、月イチ学習会の流れを交えて説明しました。

2、KJ法による分類分け

KJ法によるワークショップを用いまし

た。KJ法とは、素材となるカードをグループごとにまとめ、図解することで、問題解決や課題抽出を促す技法です。

今回の分科会では、素材となるカードとして、子どもたちの声を用意しました。このカードは事前に、東京都の複数の児童館から集めたもので、「児童館にありがとう」「児童館のいいところ」「児童館のここが好き」などの質問を子どもたちに問いかけ、その答えを、子どもたち自身の言葉で、付箋にまとめてもらったものです。日頃耳を傾けている、子どもの声をあえて可視化し、今一度子どもたちの意見と向き合うために、約500枚に上る子どもの意見を集めました。子どもたちの個性あふれる自筆の意見は、それだけでも味がある、我々へのメッセージとなっていました。

また、分析に当たり、便宜上、付箋を年齢別に3つのグループ、すなわち「小学校低学年」「小学校高学年」「中学生・高校生」に分類し、発達段階ごとに分析が行えるよう構成しました。そして、参加者はそれぞれ「低学年」「高学年」「中高生」のグループに分かれて、子どもたちの意見が書かれた付箋紙を分類し、さらに分類同士を関連づける作業を通して、子どもたちの意見から児童館を必要としている根拠、児童館にもとめている要素を読み取りました。

《低学年グループ（グループの色：ピンク）》

「先生がすき」「友達と遊べる」といった人的魅力に始まり、「ハロウィン」「一輪車が楽しい」「いろいろなおもちゃがあるから」などの各種行事や遊具、「ドッジボールが楽しい」「おにごっこ」などの遊び、「図書コーナーが大好き」などの場所に対する魅力が書かれた付箋があり、なかでも工作

に魅力を感じている子どもが圧倒的に多いという結果になりました。

これらの分類を踏まえ、低学年グループでは、友達や先生に会えるという『ヒト』、図書室や遊具など、遊ぶ道具がたくさんあるという『モノ』、行事などのイベントがあるという『コト』の3つに大きくまとめられ、これらを通し、「すき」などの『思い・気持ち』が形成されているのではとまとめられました。また、子どもたちの意見から、主体的な自己表現、すなわち、自らなにかやってみようといった意見は少なく、受動的に児童館事業を楽しんでいる様子が導き出されました。

《高学年グループ（グループの色：黄色）》

低学年同様、行事や遊具などに対する意見の一方で、「つかれていても楽しめる」「適当にひまつぶしができる」「まちあわせ」などの意見がありました。これらの意見から、児童館が「目的がなくても行ける場所」として認識されている様子が浮かび上がりました。また、「年齢に関係なく遊べる」「ほかの学校の友だちと遊べる」「いろんな人たちと遊ぶことができる」など、決められた人とは違う自由なつながりが児童館で生まれていることが示唆されました。

「先生がカードゲームの相手をしてくれる」などの意見もあり、子どもたちは自分の意思で児童館に来て、時には暇をつぶし、時には目的をもって遊びを選択している、すなわち、自分が主人公になり、自己決定できる場として、児童館を活用している姿が導き出されました。

《中高生グループ（グループの色：水色）》

中高生の児童館に求める要素には、「バスケができる」「イベントが楽しい」などに形容される目的を持った関わり方と、「ひまなときにふらっと立ち寄っても遊ばせてくれる」「ひまがつぶれる」などに形容される自由度の高い関わり方がみられました。特に、後者については、「児童館のすきなところ」という問いに対して、「ない」と解答した意見もあり、このように解答できる関係性が、利用者を引き付ける児童館の魅力になっていることが垣間見えました。

また、関連して、「家にいたくない時に、児童館に行ってストレスや悩みなどを発散して家に帰れるから、お父さんお母さんと喧嘩がおこらなくなる。」「相談とかもできる」などの意見もあり、場所としての魅力、職員との交流も児童館に求めている要素であることがうかがえました。異学年交流や新たな友人との出会いに関する意見も目立ちました。

3. 各グループの分析結果を発表（ギャラリーウォーク）

各グループのKJ法終了後、それぞれのグループで説明役と他グループを見に行く役に分かれてもらい、役割を交換しながらすべてのグループの検討結果を全員で共有しました。

年齢別に分析を行ったゆえに、それぞれのグループの検討結果からは各世代の分析だけでは気づけなかった、子どもの成長における連続性や、世代ごとの特色が強く打ち出され、世代が進むにつれて、児童館とのかかわりが主体的になり、自己実現・自己決定の場として児童館が利用されているように感じられました。

■2日目＝ディベート「児童館はいるのか」＝

1. ディベート「児童館はいるのか」

これまでの議論も材料にしながら、「児童館はいるのか」というテーマのもとディベートを行いました。

ディベートは計3回行い、参加者を3つのグループに分け、「肯定派」「否定派」「ジャッジ」の役割を順番に1度ずつ担当して頂きました。限られた時間で行うため、形式については、「肯定派」「否定派」が意見をまとめ、発表したあと、「肯定派」のみが再度「否定派」に対する意見をまとめて反論し、「ジャッジ」が議論の流れを第三者的に評価するという形をとりました。各々の経験や思い、そして1日目に行った

KJ法の成果を基に白熱した議論が行われ、様々な論点について議論が繰り広げられました。

（以下、論点を抜粋して紹介します）

《児童館という場所》

児童館という場所は必要か、公園や公民館において、雨風がしのげる遊び場を確保できれば必要ないのではないか。また、人件費や維持費などに経費がかかっていることは事実で、お金をかけてまで担保する必要がある場所なのか、という意見がありました。対して、肯定派からは、子ども専門に特化した場所、強いては、子どもを擁護し、子どもの声を地域単位で具体的に代弁する場所として児童館があるべきだとする意見、地域コーディネートの拠点として、はたまた子どもたちが成長後も帰って来ることができる場所として児童館が必要だという意見が挙がりました。

《成し得てきた成果》

児童館は、学校や家庭とは異なる、地域の立場で子どもの居場所を作り、成長を支援してきたという意見の一方で、否定派からは、公教育と比較し、児童館が成し遂げてきた成果は何か。目に見える形で表れているのかということが指摘されました。

《プログラム》

児童館以外でも、子どもに対するイベントを企画することができるという指摘に対し、児童館の行事は単発ではなく、行事を重ねていくことで、継続的に子どもの発達を支援することができるのではという意見が挙がりました。

《児童館の利用対象》

どんな子どもでも遊びに行くことができ、子ども一人ひとりが主人公になれる場所であるという良さがある一方で、時間のない子どもは利用できない、一部の子どもだけのサービスになっていないかという意見が挙がりました。

《異学年交流》

児童館は学校や家庭とは異なる人と交流する場となるという意見に対し、0歳から18歳までを対象にし、不特定多数と出会うことは、場合によっては事故を生みかねないという指摘があり、異年齢集団、異学年交流が子どもの成長に与える利点などが争点となりました。

《職員》

否定派から、職員が行う「子どものため」は、本当に「子どものため」になっているのか、大人が思う子どものためになっているのではないか、という意見があり、肯定派からは、中心は児童、子どもの意見を基に事業立てをしていることなどが挙げられました。

計3回に分けて実施されたディベートでのジャッジでは、具体性に欠けた部分や注目すべき論点について、第三者的に指摘する役割を担い、ディベート全体の質を高める役割を成していました。

2. 活動の振り返り・情報共有

グループごと2日間の活動を振り返るとともに、得た経験をどのように還元していくか、情報共有が行われました。ディベートから見出された課題に着目し、児童館の説明責任について議論を深めたグループや、改めて児童館が持つ魅力について考えたグループなど、2日間の分科会を終え、児童館が必要とされる根拠、これからの児童館に必要なエビデンスについて展望しました。

参加者数

1日目：18名 2日目：23名

参加者の声

（アンケートより抜粋）

- ・児童館の存在価値は何か？を説明することが求められている今、ディベートを行うことで見えてくるものがたくさんありました
- ・児童館のあり方についてのディベートは面白かったです。少々時間の縛りが細かくたいへんでしたが、良い経験になりました。何より、全国で子どもたちの未来についてこんなに熱い思いを持っている仲間がいっぱいいることを確認できたのが嬉しかったです。

担当者から

児童館が生まれ変わるためには何が必要なのか。子どもの声という原点に立ち返った上で、児童館というものの存在意義を根本から再考する過程を通じ、我々担当者一同も、深く考えさせられた2日間でした。



特に2日目のディベートは、全国からお集まり頂いた参加者の方々からも、自らの職場を否定する立場を経験し、児童館が抱える弱さや課題について考えさせられたとの意見をいただきました。

世の中の大きなうねりのなかで、児童館は今、まさに、その存在意義を発信していく必要があります。今回のディベートは、肯定するのが児童館職員ならば、否定する

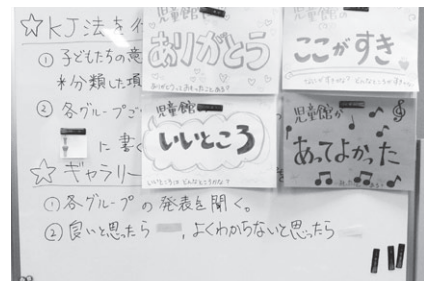
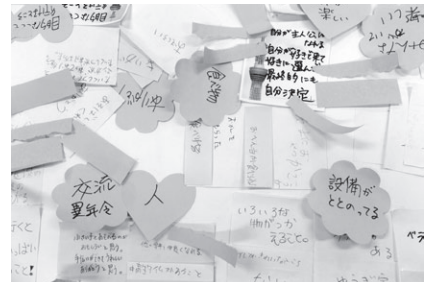
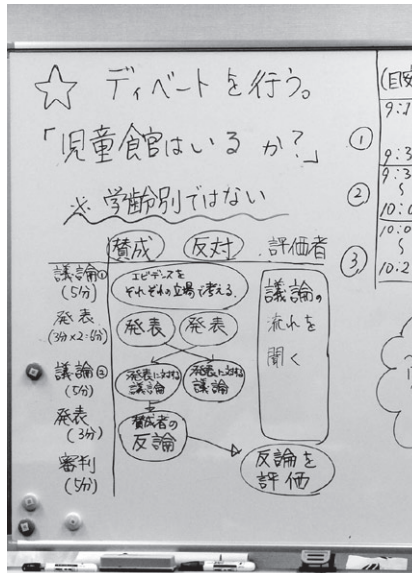
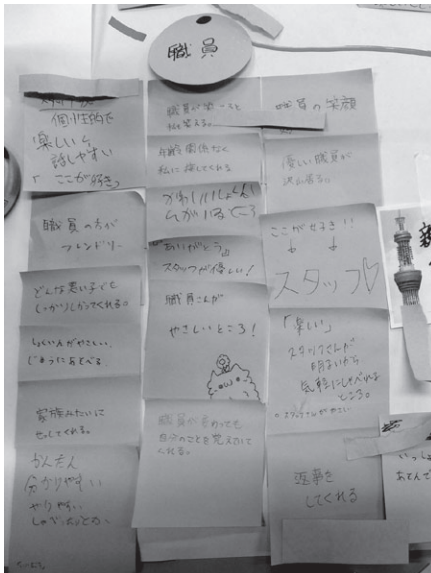
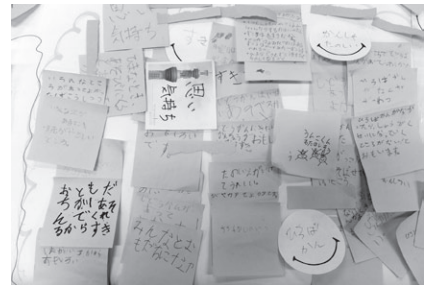
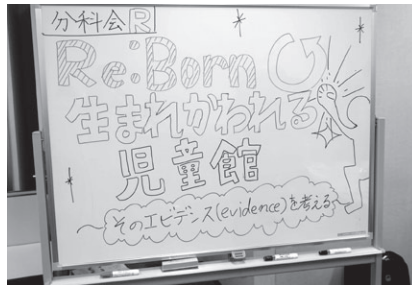
のも児童館職員であるという点において、批判の視点がまだ弱いことは否めません。しかしながら、批判に対して向き合い、説明責任を果たしていかなければならないという視点を提示できたことは、この分科会の通じての一つの成果であると感じています。

子どもたちの声を分析したKJ法から見えてきたことは、児童館が大切にしている

エビデンスは利用者の声の中にある、ということでした。子どもの声の代弁者として、健全育成の担い手である児童館が必要とされる根拠を、これからも声を大にして伝えていかなければと、決意を新たにしました。

担 当

東京児童館・月イチ学習会



分科会 S

地域のチカラを高め、子育て支援 ～つながる、つなげる、児童館

分科会Ⅰ 12月14日 16:00～18:00

分科会Ⅱ 12月15日 9:00～11:00

4階 小会議室 402B



児童館は地域に応じて柔軟な活動ができる児童福祉施設です。子育てのより大きな可能性を求め、地域とのかかわり、人とのつながりを強めるため、私たちが大切にすべきこと、そして今やるべきことを語り合ひましょう。

【事例発表者】

三浦啓子（金沢市立浅野町児童館児童厚生員）

私立幼稚園、保育園に勤務後 平成元年より金沢市立浅野町児童館に勤務。現在に至る。
児童厚生一級指導員資格保有

分科会内容

■1日目

1. 事例発表 16:00～

浅野町児童館三浦厚生員が「赤ちゃんと一緒に」と題して、活動発表をしました。

取り組むまでの経緯や苦労話、取り組みの留意点や準備、得られた子どもの成長、取組後の地域の変化や成果などをパワーポイントで順番を追って発表し、参加者からは「魅力ある活動だな」「ぜひ取り入れてみたい」との声があがっていました。

2. 配布資料の冊子について説明 16:35～

金沢市こども福祉課の青木晋氏より「金沢市子ども条例」と行政から発行の冊子「金沢市子どもを育む行動計画2013」について簡単に説明をしていただきました。

3. グループ討議① 16:45～

事例報告を受けて、グループごとに参加者それぞれが地域と連携した活動について紹介し合いました。1グループ5～6人と少人数だったので、話しやすく、疑問、関心を感じる度に質問し掘り下げていきました。初めのうちは、活動についてといっても行事内容に限られていましたが、地域の特徴や抱える悩みも様々であり、そこから厚生員の取り組む姿勢や心がけ、活動に当たっての留意点や目的のことも話も深まっていきました。

4. グループ発表① 17:40～18:00

話し合った内容をグループごとにまとめて発表していただきました。

話が深まり出した所で発表の時間となり、1日目を終了しました。「もう少し話がしたかった。」の「もっと時間ほしいね。」の気持ちを2日目につなぎました。

■2日目

1. アイスブレイキング 9:05～

気持ちをほぐそうと深層心理テストをしました。*自分を知ろう・好きになろう!!

地域の人とより親しくなるために…回りの人と自分の関係を知ってより親密になるヒントになりませんか？

「当たってる!」「そうなのかな?」診断の度に驚きとも感嘆とも取れる声が上がっていました。

2. グループ討議② 9:10～

グループごとに1日目の内容の中からポイントを絞って話しを深めました。

- ・地域に働きかけて奮闘中の方の体験談を聞くことからヒントを見つけ出そう。
- ・児童館を地域に理解してもらうために!! 悩み解決に向かって知恵を絞ろう。
- ・地域の人との関わりを深めるためには、どうしたらよいのか？
- ・地域とつながるにはどうしたらよいのか？

3. グループ発表② 10:40～10:50

グループごとに話した内容をまとめ、発表しました。

以下、それぞれのところで出た内容です。

◇地域と親しくなるためには、行事を一緒にする。他団体に顔出し顔見知りになる。行事もいいけど日常が大事。積み重ねが信頼を深め相互に協力できる関係のものになる。

◇行事ありきではなく、行事がなくても自然と足を運べる児童館作りをしなければ。そのためには、どうしたらよいのか？今後の課題でないだろうか！

◇地域も大切だけど、まずは館の職員の意思統一も大切。

◇個人の意識も時間限りのことをしては、地域に入り込めない。時間外に出かける気持ちも必要だ。

◇中高生特化型としている児童館。3年目にして全職員がどんな子でも受け入れる方針を共有できた。方針から不登校児、不良が多く来館し地域からは、問題児の集まりと言われている。地域からは、つながるどころか色眼鏡で見られている。個々を認め受け入れることで子どもは大分変わってきたが、地域のハードルは高い。

日頃から清掃活動、植物栽培、行事の手伝いなど役割を持たせての来館、参加を取り組む。揃いのTシャツ着用で仲間意識を持たす。などの方法を試してみたらどうか？との提案があった。

◇利用年齢から19歳以上の子をボランティアにつなげていく事で地域の力(ちから)の拡大につながる。

◇幼い時から訪れ小学、中学、高校。その時代ごとに何らかの形でつながってい



ば、大学で離れても結婚して親になってまた戻って来る。このつながりが地域のつながりとも言える。続け絶やさないことも大切。

◇児童館アピールの方法として、回覧板・壁新聞・便りの配信も効果有り。

参加者からは、「情報を得られよかった。」「他地域も同じ悩みがある。」「自分たちの活動を再確認できよかった。」「良い振り返りの時間が持てた。」など、声があがっていました。

4. 発表者・三浦厚生員の事例活動に対する感想まとめ 10:50～

5. 名刺交換・記念写真撮影など各々行って解散 11:10終了

担当者から

浅野町児童館「赤ちゃんと一緒」6年間

の実践報告をする事で、地域と連携する意味に気づき、児童館だからこそ出来る、子育て支援、人との関わり合い方を提案しました。初めに各児童館で行っている活動について話し合い、地域との連携の必要性を確認しました。そして、地域と連携する為に何をすれば良いか語り合い、各グループで話し合われた内容を報告しました。それぞれの児童館での取り組みや悩みを話し合う中で、地域の状況を把握し、参加者が主役になれる企画、人との繋がりを育んで行く事が大切と確認できました。

また2日目は、各グループ1日目の内容からテーマを絞り、地域との連携、人との繋がりについて具体的に話し合いました。その結果、子どもが成長する為に地域との連携が重要であり、魅力ある活動を通して、地域の人と関わり合いを深める活動に取り組む事が地域力を上げ事に繋がると再確認できました。そして、地域に応じて柔軟な活動に取り組める事が児童館であると確認しました。

それぞれの考える子育て支援を具体的に語る事で、問題を解決する為に地域とどの様に連携するかを考え、児童館活動における可能性を探る事が出来たとも思いました。しかし、子育て支援における新しい発想を具体的に深めるまでには至らなかった様にも思います。

児童厚生員としてこれからもこどもの健やかな成長を願い、地域で元気な児童館を目指し技量を高めて行きたいと思います。

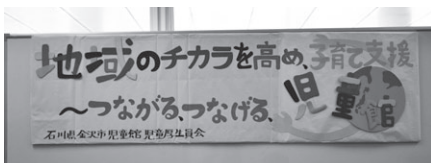
参加者数

1日目 23人

2日目 24人

担当

金沢市児童館児童厚生員会



活動紹介等パネル展示

コラッセふくしま1Fアトリウム
ウェルカムデコレーション（福島県学童クラブ連絡協議会）

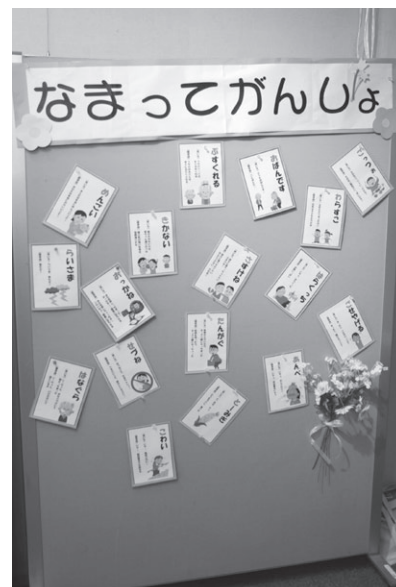


コラッセふくしま5Fプレゼンテーションスペース

福島県政の紹介（福島県庁）

福島県内の児童館の活動紹介、福島弁かるた等（福島県児童館連絡協議会）

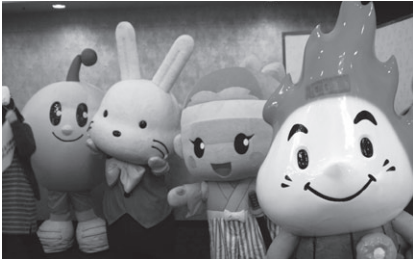
活動紹介、アクティブプレイ集の紹介（公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン）





交流会

定員を超えるお申し込みをいただき、泣く泣くお断りせざるを得ない方も多くいました。
久しぶりにお会いした方、初めての方、交流の輪が広がっていきました。
フラダンス・ウクレレなど、児童館・児童クラブ職員の芸達者ぶりも披露されました。
窮屈な会場でしたが最後までご参加いただき、ありがとうございました。



閉会式

会場の都合で2つの会議室で同時開催となりました。

全国児童厚生員研究協議会により「児童厚生員・放課後児童指導員の倫理に関する福島宣言」として「児童厚生員・放課後児童指導員の倫理綱領」が発表され、満場一致で採択されました。

また次回大会については東京での開催と発表されました。

(児童厚生員・放課後児童指導員の倫理に関する福島宣言)

児童厚生員・放課後児童指導員の倫理綱領

私たちは、児童館・放課後児童クラブが、児童福祉法の理念を地域社会の中で具現化する児童福祉施設・事業であることを明言する。

私たちは、児童館・放課後児童クラブの仕事が、地域における子どもの最善の利益を守る援助者として専門的資質を要する職業となることを強く希求する。

そのため、私たちはここに倫理綱領を定め、豊かな人間性と専門性を保持・向上することに努め、専門職者の自覚と誇りをもってその職責をまっとうすることを宣言する。

1. 私たちは、子どもの安心・安全を守って、その最善の利益を図り、児童福祉の増進に努めます。
2. 私たちは、子どもの人権を尊重し個性に配慮して、一人ひとりの支援を行います。
3. 私たちは、身体的・精神的苦痛を与える行為から子どもを守ります。
4. 私たちは、保護者に子どもの様子を客観的かつ継続的に伝え、保護者の気持ちに寄り添って、信頼関係を築くように努めます。
5. 私たちは、地域の健全育成に携わる人々・関係機関と連携を図り、信頼関係を築くように努めます。
6. 私たちは、事業にかかわる個人情報を適切に保護(管理)し、守秘義務を果たします。
7. 私たちは、子どもの福祉増進のために必要な情報を公開し、説明責任を果たします。
8. 私たちは、互いの資質を向上させるために協力して研さんに努め、建設的に職務を進めます。
9. 私たちは、地域において子育ての支援に携わる大人として人間性と専門性の向上に努め、子どもたちの見本となることを目指します。

平成25年12月15日

全国児童厚生員研究協議会

(第13回全国児童館・児童クラブ大会・東北復興支援フォーラムにて採択)





エクスカーション

震災や原発事故の影響を受けながらも、子どもたちの遊び・生活環境を守る児童館・放課後児童クラブの様子をご覧いただきました。

Aコース：相馬方面

訪問先：(12/15)伊達市霊山児童館、(12/16)相馬市中央児童センター、南相馬市小高合同児童クラブ、南相馬市 奇跡の一本松・鎮魂の森

参加者：22名



Bコース：いわき方面

訪問先：(12/15)会場から移動、(12/16)いわき市小名浜児童センター、ながさき児童クラブ、豊間潮風児童クラブ、久之浜児童クラブ、四倉児童クラブ

参加者：19名



第13回全国児童館・児童クラブ大会 遊びの公開ラボ

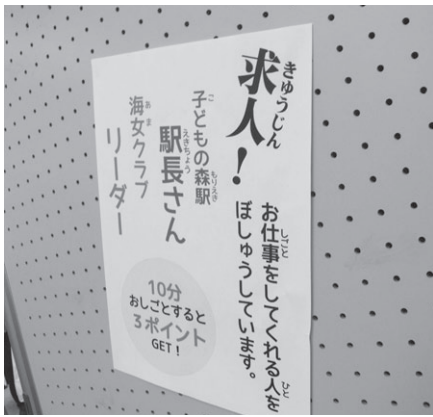
全国から20のおもしろあそびと「とり+かえっこ」

全国大会第2部として福島の子どもたちに全国からたくさんの遊びをお届けしました。各地の大型児童館を中心にして20のブースが出展！合わせて、こどもの城が展開している「とり+かえっこ」(おもちゃの交換を中心にした“子どものまち”遊び)で会場全体を更に盛りあげました。

出展団体はP 4に掲載しています。

この事業は、株式会社松屋（松屋銀座）様の寄付で実施いたしました。





掲 載 記 事

福 島 民 報

2013年（平成25年）12月15日（日曜）

全国の児童館、放課後児童クラブの職員らが参加している大会



子育てで復興支援を

福島県で全国児童クラブ大会
きょうまで

「第十三回全国児童館・児童クラブ大会」東北復興支援フォーラムは十四日、福島市の福島ビューホテルなどで開幕した。十五日まで。

児童健全育成推進財団、全国児童厚生員研究協議会の主催。児童健全育成推進財団、全国児童厚生員研究協議会の主催。児童健全育成推進財団、全国児童厚生員研究協議会の主催。

いる。十四日はコミュニケーションデザイナーの山崎亮氏が記念講演をしたほか、本県を含む被災三県の児童館・放課後児童クラブの職員が現状などを報告した。分科会として被災地報告、防災、子育て支援など十七テーマごとに意見交換などを行った。

2013年（平成25年）12月16日（月曜日）

福 島 民 報

遊びで児童に笑顔 全国クラブ大会 公開ラボ

福島



工作を楽しむ子どもたち

第十三回全国児童館・児童クラブ大会東北復興支援フォーラムの

第二部「遊びの公開ラボ」全国から子どもたちの遊びをプレゼントする。は十五日、福島市のこむこむで開かれ、親子連れでにぎわった。

全国二十カ所の大型児童館で実施されている遊びを繰り広げ、東京電力福島第一原発事故で被災した本県の子どもたちを元気づけるのを目的として

子どもたちは児童館ごとに設けられたコーナーを巡り、折り紙や工具などを使った作品づくり、ゲームなどを楽しんだ。東北復興支援フォーラムは児童健全育成推進財団、全国児童厚生員研究協議会の主催。十四、十五の両日、福島市で開き、全国の児童館や放課後児童クラブの職員らが意見交換した。



島 子育ての現状を学ぶ

福 全国児童館・児童クラブ大会

全国の児童館や学童クラブなどの関係者が一堂に会した「第13回全国児童館・児童クラブ大会」は14、15の両日、福島市の福島ビューホテルで開かれ、関係者約520人が子育ての現状



全国から約520人が出席した大会

を共有し、遊びや居場所について協議した。
児童健全育成推進財団、全国児童厚生員研究協議会の主催、県児童館連絡協議会、県学童クラブ連絡協議

会などの共催、福島民友新聞社などの後援。全国持ち回りで毎年開催しており、今回は子育て支援と東北復興を目的に本県で初開催した。

14日は、京都造形芸術大学教授でコミュニケーションデザイナーの山崎亮氏が「子ども・子育てのためのコミュニケーション」をテーマに講演したほか、被災した本県、宮城、岩手の3県関係者が特別報告。分科会も催され、本県では、原発事故の影響で子どもの体力が低下していることや放射能に伴う子育て不安などの課題が報告された。

15日も引き続き分科会が開かれ、児童館や児童クラブの魅力づくりなどについて話し合った。



ゲームや工作を楽しむ子どもら

通貨集めおもちゃ交換

遊び通じリサイクル学ぶ

遊びの公開ラボ「全国からの20のおもしろ遊びと『とりかえっこ』」は15日、福島市のこむこむで開かれ、福島市のこむこむで開かれた。家族連れが遊びを通して、リサイクルや社会の仕組みを楽しく学んだ。児童健全育成推進財団など、第13回全国児童館・児童クラブ大会東北復興支援を体験して「通貨」を集め、遊び通じリサイクル学ぶ

こむこむで子どもイベント

「通貨」をなすおもちゃと交換する参加者

し、自分の好きなおもちゃと交換すると笑顔で持ち帰った。

